

第36回 地域づくり団体 全国研修交流会

福島大会



～未来を拓く地域づくり～

ふくしまから
はじめよう。

報告書

平成30年 **11.16金→18日**

全体交流会・全体会会場

Jヴィレッジ (糟粕町)

〈主催〉 ● 地域づくり団体全国協議会
● 第36回地域づくり団体全国研修交流会福島大会実行委員会
● 福島県まちづくり会議

〈後援〉 ● 総務省
● 一般財団法人地域活性化センター
● 一般財団法人全国市町村振興協会

分科会会場

福島県内11会場



Contents

開催概要	2
全体交流会・全体会プログラム	2
開催場所マップ	3～4
フォトギャラリー 全体交流会・全体会	5～8
ごあいさつ	9～14
主催者あいさつ 岡崎 昌之（地域づくり団体全国協議会会長）	9
歓迎あいさつ 鈴木 正晃（福島県副知事）	10
来賓あいさつ 佐々木 浩（総務省大臣官房地域力創造審議官）	11
来賓あいさつ 岩崎 正敏（一般財団法人地域活性化センター 常務理事）	12
次回開催県PR 宇高 昌利（第37回地域づくり団体全国研修交流会兵庫大会 実行委員会委員長）	13
主催者あいさつ 武藤 一夫（第36回地域づくり団体全国研修交流会福島大会 実行委員会委員長）	14
全体会開催報告	15
分科会活動紹介	16～22
分科会開催報告	23～60
第1分科会：福島市	23～26
温泉と再生可能エネルギーで復興再生へ ～地域住民との合意形成の中で生まれた新たな産業とまちづくり～	
第2分科会：二本松市	27～30
里山の恵みと人の輝くふるさとづくり ～今活かそう！資源は地域に埋もれてる～	
第3分科会：郡山市	31～34
未来を拓く開拓者のまちづくり ～安積疏水のごとく、脈々と流れる開拓精神と復興に向けての心意気～	
第4分科会：三春町	35～38
伝統ある町からアニメ文化を発信 ～新しいまちづくりのかたちと魅力～	
第5分科会：鮫川村	39～42
農山村の可能性を探る わくわく元気発信ライフシェアリング！ ～元気な農業グループの底力、多彩な体験交流が生まれる現場を見る～	
第6分科会：三島町	43～46
奥会津の「山力＝やまぢから」を発揮して未来への橋渡し ～縄文に学ぶ、持続可能なライフスタイルの創造～	
第7分科会：昭和村	47～50
からむし織とカスミソウの里「昭和村」 ～昭和へ帰ろう～	
第8分科会：南会津町	51～54
ワカモノ×地域資源（アロマ）でつくる集落 ～未来をつくる若者たちが盛り上げる地域づくり～	
第9分科会：南相馬市	55～58
福島の明日を創る人材“あすびと福島”を生み出す最前線を訪ねる ～いまだに避難が続く地域と一方で前進を始めた福島に向き合う～	
第10分科会：檜葉町	59～62
全町避難からの新たなまちづくり ～チャレンジする“人”に学ぶ～	
第11分科会：いわき市	63～66
対話で育てるそれぞれのいま・未来 ～課題先進地、浜通りから～	
参加者一覧	67～69
参加者アンケート紹介	70

開催概要

第36回
地域づくり団体全国研修交流会 福島大会
～未来を拓く地域づくり～

主催	開催日
● 地域づくり団体全国協議会	平成30年11月16日(金)～18日(日)
● 第36回地域づくり団体全国研修交流会福島大会実行委員会	● 交流会 11月16日 18:00～20:00
● 福島県まちづくり会議	● 全体会 11月17日 9:30～12:00
	● 分科会 11月17日 ～18日
後援	開催場所
● 総務省	● 交流会 Jヴィレッジ
● 一般財団法人地域活性化センター	● 全体会 Jヴィレッジ
● 一般財団法人全国市町村振興協会	● 分科会 福島県内11会場

全体交流会・全体会プログラム

全体交流会	全体会
開催日時：11月16日 18:00～20:00	開催日時：11月17日 9:30～12:00
会 場：Jヴィレッジ	会 場：Jヴィレッジ
①歓迎セレモニー スバリゾートハワイアンズ	①オープニング 福島県の映像
②開会・歓迎あいさつ 遠藤 智(広野町長) 松本 幸英(檜葉町長) (代理)青木 洋(檜葉町教育委員会教育長)	②開会 主催者あいさつ 岡崎 昌之（地域づくり団体全国協議会 会長） 歓迎あいさつ 鈴木 正晃（福島県副知事） 来賓あいさつ 佐々木 浩（総務省大臣官房地域力創造審議官） 来賓あいさつ 岩崎 正敏（一般財団法人地域活性化センター 常務理事）
③来賓・主催者紹介	③分科会報告 第1分科会～第11分科会
④乾杯 櫻井 泰典(福島県企画調整部長)	④次回開催県からのお知らせ 兵庫県のみなさん
⑤交流会	⑤閉会
⑥次回開催県あいさつ 宇高 昌利（第37回地域づくり団体全国研修交流会兵庫大会 実行委員会委員長）	主催者あいさつ 武藤 一夫（第36回地域づくり団体全国研修交流会福島大会 実行委員会委員長）
⑦主催者あいさつ 武藤 一夫（第36回地域づくり団体全国研修交流会福島大会 実行委員会委員長）	
⑧閉会	

開催場所マップ

第2分科会

(特非) ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会 P27

里山の恵みと人の輝くふるさとづくり
～今活かそう！資源は地域に埋もれてる～



第1分科会

土湯温泉町地区まちづくり協議会 P23

温泉と再生可能エネルギーで復興再生へ
～地域住民との合意形成の中で生まれた新たな産業とまちづくり～



第9分科会

(一社) あすびと福島 P55

福島の明日を創る人材“あすびと福島”を生み出す最前線を訪ねる
～いまだに避難が続く地域と一方で前進を始めた福島に向き合う～



第4分科会

(株) 福島ガイナ P35

伝統ある町からアニメ文化を発信
～新しいまちづくりのかたちと魅力～



第10分科会

(一社) ならはみらい P59

全町避難からの新たなまちづくり
～チャレンジする“人”に学ぶ～



第6分科会

(一社) IORI 倶楽部 P43

奥会津の「山力＝やまぢから」を発揮して未来への橋渡し
～縄文に学ぶ、持続可能なライフスタイルの創造～



第7分科会

昭和分科会 P47

からむし織とカスミソウの里「昭和村」
～昭和へ帰ろう～



第8分科会

(特非) 南会津はりゅう里の会 P51

ワカモノ×地域資源(アロマ)でつくる集落
～未来をつくる若者たちが盛り上げる地域づくり～



第3分科会

郡山市ブロック会議 P31

未来を拓く開拓者のまちづくり
～安積疏水のごとく、脈々と流れる開拓精神と復興に向けての心意気～



第5分科会

(特非) あぶくまエヌエスネット P39

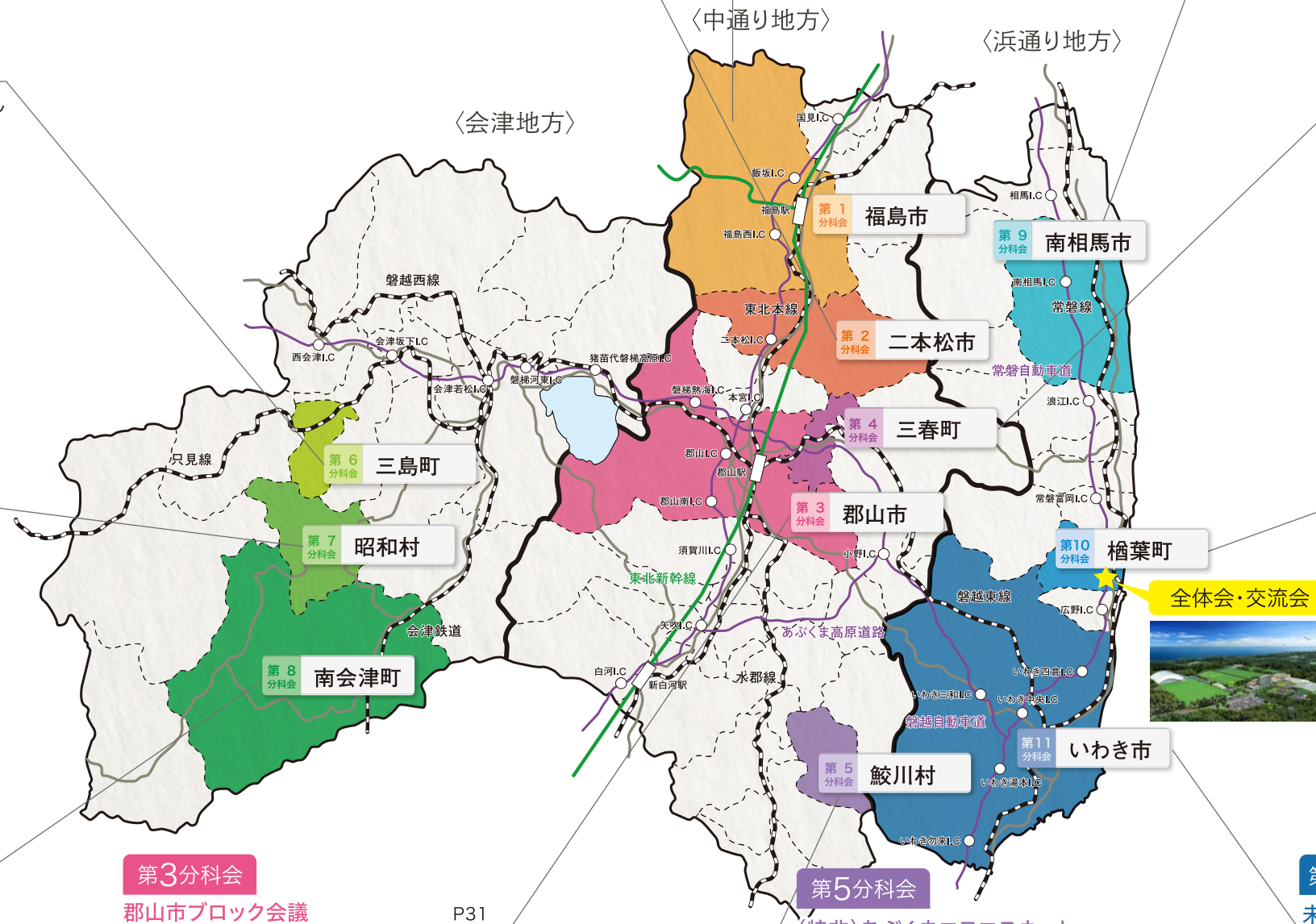
農山村の可能性を探る わくわく元気発信ライフシェアリング！
～元気な農業グループの底力、多彩な体験交流が生まれる現場を見る～



第11分科会

未来会議事務局 P63

対話で育てるそれぞれのいま・未来
～課題先進地、浜通りから～



フォトギャラリー

全体交流会

開催日時: 11月16日 18:00~20:00
会 場: Jヴィレッジ



来賓紹介



賑わいを見せた福島県の地酒コーナー



広野町長 ご挨拶



檜葉町教育委員会教育長 ご挨拶



主催者挨拶



デザートコーナー



地域間交流



乾杯風景



参加者の皆様



次回開催県 兵庫県のご挨拶



豚舌のキッチンカー



フォトギャラリー

全体会 開催日時:11月17日 9:30~12:00
会場:Jヴィレッジ



分科会発表風景



会場風景



分科会発表風景



分科会発表風景



分科会発表風景



Jヴィレッジに到着するバス



福島の銘菓を参加者のみなさまへ



兵庫県の皆さんによる次回開催県PR



受付



館内には福島県のポスターを掲示



震災当時のパネル展示



福島大会実行委員会委員長 武藤一夫による大会参加お礼



会場となったJヴィレッジセンターハウス(右)と新棟(左)

主催者あいさつ

地域づくり団体全国協議会 会長

岡崎 昌之



第36回の全国大会を開催するにあたり、福島県庁や市町村の皆様、地域づくり団体の多くの方々に大変お世話になりました。改めて御礼を申し上げます。総務省からは佐々木地域力創造審議官、地域活性化センターからは岩崎常務理事にもご参加いただき大変有難うございました。

昨夕こちらに参りましたが、会場であるJヴィレッジの天然芝が夜間照明に青々と照らし出されており、子どもの頃からサッカーをやっていた者としましては、こういう青い芝を見ますと、思わず駆け出したくなるような思いでした。

しかし2011年の東日本大震災では、ここJヴィレッジが福島原発対応の最前線になったわけです。今回、ようやく一つの段階を終えて、Jヴィレッジは復活いたしました。福島県でもJヴィレッジは復興の一つのシンボルです。ここで福島大会の全体会が開催できますことは、感慨深いものがあります。来春からはサッカーを楽しむ子どもたちやJリーガーが、このサッカーの聖地で走り回ってくれる日を夢見ているところです。

ちょうど1カ月前、数年ぶりに宮崎県を訪れました。一つは県西部の西米良村です。伺った地区は役場がある町の中心部から、車で40分ほど山間部に入った小川地区です。川沿いに狭い道を辿って行きますと、突然ぱっと開けた桃源郷のような地区です。30戸98人が、村と一緒に、茅葺きの農家レストランを造り、そこの料理が評判が良く、沢山の人がこの地区を訪れるようになった。夜にはホテルも飛び交う、夜神楽もやる。だんだん評判が高まってきた地区です。多くの人に来てくれるようになったので、本当の桃源郷にしようと皆で花の咲く木を植えることになった。勉強に來たのが福島市の花見山公園です。桃や桜も立派に咲くようになり、98人の集落に26名の移住者が住むようになった。小学校の子どもはゼロだったが、今は6名の小学生がいます。

もう一つは高千穂町の秋元という集落です。私共はバスで移動していたのですが、バスでは秋元まで入れないから、高千穂神社の前でタクシーに乗り換えて、分乗してやっと入れるという集落です。そこも30戸96名ですが、

役場を10年ほど早めにリタイアした飯干さんという人物が「よし、俺がこの秋元の集落をなんとかしよう」と、まずは農家民宿、甘酒、どぶろくを作る。これも中途半端なものではありません。研究を重ねて、まるで実験室のような製造工場を自分の家の隣に建てて、集落内のお米を全部買い取り、甘酒、どぶろくの生産、販売をしています。現在では1億円を売り上げ、若い人を雇用して従業員は11名です。そこへは夕刻入ったのですが、朝起きると裏庭には10台近い車が並んでいました。従業員が通勤してきているわけです。

田園回帰という言葉がはやりのようになっていますが、こういう集落の状況を見ていますと、田園というにはほど遠い、厳しい山間部です。また離島など、厳しい生活を強いられる地域にも、若い人たちが目を向け、そこに住みたい、ここで腹を決めて住み続けたいという人たちが増えています。この全国研修交流会にも、地方で頑張ろうという若い人たちの参加が徐々に増えてきています。

先日、福島県の会議で福島県へのUターンのデータをいただきました。それによりますと、平成27年には61世帯が福島県に入ってきた。28年には117世帯に増え、昨年度29年度は174世帯です。この県が把握しているデータだけでも、毎年ほぼ倍々と福島を目指して、移住して来る人たちが増え始めています。福島は首都圏に近いので、福島で住みたいという人は多かったわけです。大震災以降、少しその動きは止まりましたが、ここ数年、新しい大きな勢いになってきていることは事実です。

本日は、地域づくり団体で頑張ろうという人たちがお集まりですが、地方へ移住しよう、この素晴らしい魅力のある所でちゃんと生活をしようという人たちを、どう心豊かに、自分たちの新しい戦力として迎え入れていけるかが、私共に課された重要な使命ではないかと思います。今日、明日、福島の現場を見ながら、ヒントになるような考え方や生き方、仕組み等々を十分に学んでいけたらと思います。

歓迎あいさつ

福島県知事

内堀 雅雄（代理／福島県副知事 鈴木 正晃）



福島県副知事の鈴木正晃でございます。本日は福島県知事に代わりまして、あいさつさせていただきます。

第36回地域づくり団体全国研修交流会福島大会がこのように盛大に開催されますことを心よりお喜び申し上げます。皆さん、ようこそ福島へお越しくださいました。県民を代表して心から歓迎をいたしますとともに、福島県での開催にご尽力頂きました関係の皆さまに深く敬意を表します。

東日本大震災、そして原発事故から7年8カ月が経過をいたしました。この間、ここにいる皆さんを始め、国内外からの温かいご支援によって、福島の復興は着実に前へと進んでおります。日本サッカーの聖地Jヴィレッジは、震災後は長らく原発事故対応の拠点として大きな役割を果たしてまいりましたが、多くの苦難を乗り越え、今年の7月に芝生のグラウンドも復活しました新生Jヴィレッジとして再始動を成し遂げました。どんな困難も、克服できるという福島の復興のシンボルでもあります。本日、Jヴィレッジでの全体会の後、県内で特色ある地域づくりに取り組まれている分科会のイレブンが皆さんをお迎えいたします。参加される皆さんには、ふるさとの再生と復興に向けて挑戦している地域の取組を体感していただき、それぞれの今後の活動にいかしていただくことで、未来を拓く地域づくりの輪が広がることを期待しております。また、この機会にぜひ美しい自然や奥深い歴史、伝統文化、豊かな食など福島の様々な魅力に触れていただき、復興が進んでいる福島県の元気な姿を多くの方々に伝えていただければ幸いです。

結びに、大会の成功と皆さんのご健勝、ご活躍を心からお祈り申し上げまして歓迎のあいさつといたします。平成30年11月17日、福島県知事 内堀雅雄（代読）。本日はよろしくお願いいたします。



来賓あいさつ

総務省大臣官房地域力創造審議官

佐々木 浩

ただいまご紹介いただきました、総務省地域力創造審議官の佐々木でございます。本日、第36回「地域づくり団体全国研修交流会」福島大会が開催されるにあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。

本日は、全国から多くの方々のご参加を得て、福島大会がこのように盛大に開催されますことを、心よりお喜び申し上げます。本日で参加いただいております皆さまにおかれては、日頃から、全国各地で展開されている地域づくりの取組の推進にご協力いただいております、厚く御礼を申し上げます。

本年は、6月から7月に掛けて中国・四国地方を襲いまた豪雨災害、9月に発生しました北海道胆振東部地震をはじめ、災害が相次いでいます。

ここ福島もまた、東日本大震災から7年を経過した今もなお、避難先での生活を強いられている方々もいらっしゃると思いますし、この会場のある楡葉町もそうですが、避難指示が解除されて、本格的な復興に取り組んでいるという地域もございます。

災害時の避難所の円滑な運営など日頃からのコミュニティ形成・地域づくり団体間でのネットワークの構築の重要性が指摘されていますが、災害後の復旧・復興においても、地域づくり団体の皆さまが果たす役割は極めて重要です。



全国の地域づくり団体の皆さまが、この福島大会を通じて、歴史や自然などの地域資源を活用した取組や震災復興の取組などに触れながら、各地域で展開されている多くの地域づくりの取組について、直接学び、互いに情報を共有し、人と人との交流や連携の輪を広げられることは、誠に有意義なことであり、これらをそれぞれの地域で活かしていただくことで、地方創生の更なる推進に大きく貢献するものと期待しています。

総務省としても、地域協力活動を行いながら地域への定住・定着を図る「地域おこし協力隊」、復興に伴う地域協力活動を通じてコミュニティ再構築を図る「復興支援員」、そのほか地域経済の好循環を拡大するための取組や、地方移住を希望する方々の様々なニーズに応えるための取組などを積極的に推進することにより、地方の自主的・主体的な地域力の創造に向けた取組を積極的に支援していきたいと考えています。

最後に、本大会の開催にあたりご尽力いただきました岡崎会長、福島大会実行委員会をはじめとする地域づくり団体の皆さま、福島県や県内市町村の関係者の皆さまに心から感謝申し上げますとともに、本大会の成功とご参加いただいた皆様のご活躍を祈念し、私の挨拶とさせていただきます。

一般財団法人地域活性化センター 常務理事

岩崎 正敏

本来であれば理事長の椎川がご挨拶申し上げるべきところでございますが、所用により出席が叶いませんので、椎川より預かってまいりました挨拶状を代読させていただきます。

このたびは、第36回「地域づくり団体全国研修交流会」福島大会が、多くの方々のご参加を得て、このように盛大に開催されますことを、まず心よりお喜び申し上げます。

私ども地域活性化センターは、昭和60年の設立以来、活力にあふれ、個性豊かな地域社会の実現のため、全国で展開されている様々な地域活性化の取組を支援してまいりました。

地方創生を成し遂げるためには、現場主義により主体的に行動し、既存の縦割りではなく、地域内外の人脈やノウハウをつなぐことのできる人材、つまり横串人材の育成が急務となっております。その課題に対応すべく、当センターは今年からの新規事業として、自治体と連携して横串人材育成をパッケージとして推進できるよう、全国地域リーダー養成塾や地方創生実践塾、土日集中セミナーの活用も含めた「人材育成パッケージプログラム」をスタートしました。既に、秋田県由利本荘市、千葉県いすみ市、京都府福知山市、山梨県北杜市、静岡県三島市、三重県四日市市、山形県置賜広域行政事務組合、島根県飯南町、埼玉県加須市、静岡県牧之原市、熊本県菊池市と連携協定を締結し、現在、各県町村会との協定締結を進めています。

私ども地域活性化センターは地域づくり団体全国協議会の事務局を務め、地域づくり団体の活動支援を行わせていただいておりますが、今年度の活動の一端を申し上げます。

まず、4月に地域活性化センターの賛助会員制度を導入し、より熱心に地域づくり活動を行う団体に対し、重点的に支援を行うこととしました。皆様におかれまして是非とも入会いただきますようお願いいたします。

5月には昨年度に引き続き、総務省とも連携して地域づくり団体都道府県協議会会長及び都道府県地域づくり団体担当課長会議を開催し、都道府県協議会を代表して、石

川県や長崎県などの事例発表の後、グループディスカッションを行い、議論を深めました。会議の中で、日本は災害多発国であることから地域づくり団体による災害に備えたネットワークづくりの重要性についてもお伝えしたところでございます。災害等の緊急時は臨機応変で迅速な対応が迫られますが、避難所の円滑な運営を図るためにも日頃からのコミュニティ形成の重要性が指摘されています。そのためにも、特に各地の地域づくり団体のネットワークを活用した共助、すなわち公助が行き渡る前の初期の応援の重要性を意識する必要があると感じております。

現在、それぞれの地域には、少子高齢化や地域経済の停滞など厳しい状況下にありながら、地域の課題解決に向け積極的に活動されている皆様がおられますが、そのことに改めて敬意を表しますと共に、当センターといたしましても、地域づくり団体全国協議会の活動をはじめ、全国の地域づくり団体の活動を今後とも支援して参りたいと考えております。

今回、全国の地域づくり団体の皆様が、ここ福島県において『ふくしまからはじめよう。～未来を拓く地域づくり～』をテーマに開催される研修交流会を通じて、県内11ヶ所で開催される分科会も含めて、歴史や自然、また福島県が誇る食文化などの地域資源に触れつつ、現地で展開されている多くの地域づくりの取組について、その地域の皆様から直接学び、互いに情報を共有し、人と人との交流や連携の輪を広げられることは、まことに有意義なことで存じます。

全国からご参加の皆様におかれましても、この研修交流会で得られた知識、体験、人的ネットワークなどをそれぞれの地域へお持ち帰りいただき、今後の地域づくりに生かしていただきたいと存じます。

最後になりましたが、本大会の開催にあたりご尽力いただきました福島大会実行委員会をはじめとする地域づくり団体の皆様、福島県や市町村の関係者の皆様に心から感謝申し上げますとともに、本大会が成功裏に終わりますことをご祈念申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。



次期開催県あいさつ 兵庫県

兵庫県大会実行委員会 委員長

宇高 昌利

慶応4年(1868)兵庫港と内陸部の旧幕府領を管轄する機関として兵庫県ができました。明治4年の廃藩置県と9年の合併で日本海から瀬戸内までの広い県になりました。そこに現在、550万の県民が生活しています。人口増加の都市部から、人口減少の限界集落まで、日本の縮図のような県です。昔の五つの国からできているので、本日の資料に入っている「五国で一県!?兵庫県」。これは、摂津、播磨、但馬、丹波、淡路の旧五国が一つになって兵庫県になったということです。各地域別の特徴をご紹介します。

まず摂津は、神戸市を中心とし、平安の頃より産業の入り口の神戸港があり、終戦後も神戸製鋼を中心とした重工業地帯から、現在ではスーパーコンピューター「京」や最先端医療、神戸ファッションなど、文化の中心になっています。

続いて播磨。東経135度、北緯35度、日本のへそ脇市や子午線のまち明石市から、西は討ち入りで有名な播州赤穂。中心に世界遺産「姫路城」があり、そこに播磨平野が広がっています。有名な酒米「山田錦」は北播磨地域の特産です。南部は主に工業地帯ですが、鯛、蛸、海苔、牡蠣など瀬戸内の潤いも十分です。

北側の但馬。まず海産物は、ホタルイカは日本一の水



揚げですし、有名な「松葉ガニ」の水揚げがあります。この地で一番有名なのは「短角和牛」。ここで生まれた子牛が「神戸ビーフ」となり、また松坂や近江で育ち、名産牛になります。また、但馬の中心の豊岡では「城崎温泉」や「コウノトリの郷」などもあります。

次に丹波。京都から播州姫路まで結ぶ丹波街道の道筋にもなっており、ちょうど京都の後ろ盾の地域です。「京の食」の支えになっている地域でもあります。有名なところでは丹波黒大豆、大納言小豆、山の芋、松茸や丹波栗もあり、この地域は食の宝庫にもなっています。

最後は淡路。古事記で伊弉諾尊が日本列島を創る時、最初に創ったのが淡路島と言われています。明石大橋や鳴門大橋。鳴門の渦潮などは有名で、そこで育まれた鯛は味の上でも有名です。鰹やクエ、フグなどもあり、淡路玉ねぎとともに、京阪神などの食材の基になっています。

そういった五つの地域からなる兵庫ですが、平成7年1月17日、阪神淡路大震災にあいました。「頑張ろう兵庫!」、でこれまでやってまいりました。今日、明日はそれぞれの分科会で東日本大震災についても勉強させていただくのですが、共にこれからも、皆さんと一緒に兵庫も頑張りたいと思います。ありがとうございます。



福島県大会実行委員会委員長あいさつ

第36回地域づくり団体全国研修交流会福島大会 実行委員会委員長

武藤 一夫



第36回地域づくり団体全国研修交流会福島大会の開会にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。全国各地から多くの皆さまにご来県いただき、全体交流会、全体会を開催できましたことを、心から厚く御礼申し上げます。また、実行委員会として至らない点もありましたが、皆さまには運営にご協力いただき、本当にありがとうございました。Jヴィレッジの全体会を終え、これから分科会のイレブン、11の地域が皆さまをお迎えいたします。分科会では様々な課題に向き合いながら、ふるさとの再生や伝統・文化の継承、地域資源を活用した特色ある取組に挑戦し

ている個性豊かな未来を拓く地域づくりを体感していただけるのではないかと考えております。先ほど、兵庫県の方々から力強いPRをしていただきました。福島大会が来年の兵庫大会の開催に少しでも参考になれば幸いと存じます。

結びに、「ふくしまからはじまる」地域づくり活動のさらなる活性化とご参会の皆さまのますますのご健勝とご活躍をご祈念申し上げ、お礼の言葉に代えさせていただきます。本当にありがとうございました。



全体会開催報告

開催日時:11月17日 9:30~12:00
会場:Jヴィレッジ



全体会会場風景



第1分科会



第2分科会



第3分科会



第4分科会



第5分科会



第6分科会



第7分科会



第8分科会



第9分科会



第10分科会



第11分科会

分科会活動紹介

第1分科会



第1分科会を担当しています土湯温泉町地区まちづくり協議会の会長加藤勝一と申します。どうかよろしくお願いいたします。第1分科会は福島県の県都であります福島市が担当しております。その奥座敷とも申すべき土湯温泉町が舞台となっております。

位置ですけれども、北海道、岩手県に引き続いて3番目の面積が福島県と言われております。福島県の中でも大きく浜通り、中通り、会津と三つに分かれており、土湯温泉町は中通りで、Jヴィレッジから直線で約80キロの位置にあります。土湯温泉町の開湯の歴史は西暦600年代、いわゆる聖徳太子の時代と言われております。まだ温泉湯治場の雰囲気を残しており、磐梯山国立公園、それから景観、温泉の量、泉質にも優れていることから、環境省の国民保養温泉地に指定されております。世帯数は180、人口は380人。高齢化率は52パーセント。これは住民基本台帳の今年1月現在の数字になっております。ご多分に漏れず少子高齢、人口減少社会が進んでおることです。土湯の伝統工芸品は、こけしであります。東北三大こけしの発祥地の一つとして、土湯温泉のこけしは有名です。

こういった風光明媚な土湯温泉町が2011年3月11日に東日本大震災の発生によって壊滅的な被害を受けました。県内には20以上の温泉観光地がありますが、一番甚大な被害を受けたのは土湯温泉町ではないかというふうに思っております。震災前16軒の旅館がありましたが、なんと3分の1にあたる5軒が廃業を余儀なくされました。何とかこの状況を打開したいということで、地域の人たちが集まり土湯温泉町復興再生協議会をつくりました。震災から7カ月後の10月2日であります。評論家はいらない、こう申しましてお集まりいただいた29名の有志の方々でありました。コンセプトは『訪ね観る誰もが憩う光るまち』、ここに観るということと光る、観光という文字を入れました。また全国から土湯温泉町においでいただき、そういった思いを込めました。

ポイントは五つあります。温泉観光地の将来を占うモデル地域を構築したい。2番目は少子高齢、人口減少社会へ対応したい。それから3番目、自然再生エネルギーを活用したエコタウンの形成。4番目に産官学の連携。5番目が計画を支える組織の確立。この5点であります。大変な問題が起きました。実は、廃業した5軒の旅館を何とかしたいという、この大きな課題の中で取り組んだわけでありましたけれども、この震災の5年前にまちづくり三法というのが改正になりました。大店法、中心市街地活性化法、それから都市計画法。この都市計画法の中で、いわゆる市街地調整区域、これが開発をしないということでかなり厳しくなりました。土湯温泉町は温泉街が大体30ヘクタールあります。その中の中心市街地21ヘクタールが調整区域ですから、空

いてしまった旅館の転用が効かないという、そういう大きな課題にぶつかりました。それで産官学の連携、福島市とも連携を図り、復興再生協議会地区まちづくり協議会へ発展させました。事業計画期間は2014年から18年、今年が最終年度であります。事業費が21億5000万円。コンセプトは『こけし育む健康・湯の里土湯温泉』。何よりも空き旅館、店舗、住宅を残さない、これを計画の中心に据えました。

復興再生の取り組みとしては、都市再生整備計画事業、再生可能エネルギー事業、にぎわいを生み出す事業、この三つであります。これが成果であります。後ほど第1分科会に参加される方々には土湯温泉町においでいただき、見学をいただく予定となっております。それからもう一つ、にぎわいではつちゆ湯愛エビと題しまして、エビの養殖事業を始めました。こういったことで土湯温泉町は今、活性化に進んでいます。第1分科会にぜひお越しただいてご検証いただきたいと思います。ありがとうございます。

第2分科会



おはようございます。ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会から第2分科会の発表をさせていただきます。私たちの考える地域づくりとはというところから入っていきたいと思いますが、第2分科会の会場は二本松市であります。そもそも地域づくりとはなんだろうとぼーっと考えています。地域の人が主体となって衰退した経済力を盛り上げたり、人口を維持もしくは増やしたりするための活動。一般的には会社組織と同じことです。世の中から必要とされなくなった会社は淘汰され、つぶれる。でも、そんな単純なことではないということです。そんな会社と違うこと、先人から土地への思いを受け継いで、土地を耕し、土地を育て、投資したのは土地であります。そして、それらはコミュニティによってつながっているのです。

思い返せば、かつて村づくり経営にあたったところは、食料の仕事づくりと、そして国策としての地方移住、これが少しはあったのかなというふうに考えております。こうして地域づくりがなされてきた結果、近年、地域は衰退の一途をたどり、我々の基幹産業であった養蚕業も、地域の雇用を守るための誘致企業も、グローバル経済の中では空洞化していったということでもあります。地域づくりの考え方を整理するために、村はなくなって当然というところからもう一度再出発してみようということでもあります。里山という場所は、人が暮らしていくのに都合がいいから切り開かれた場所であり、現代においてはその生産性の低さから住む必要性がほとんどなくなってしまったので衰退に向かっているとすれば、どういことになるかと。次々に学校、農協、行政が合併し、疲弊の色が濃くなってきて、本当に何もなくなってしまうということになってしまいます。

土地同士つながってきた地域コミュニティをいかし、地域再生を目指すのが我々ゆうきの里東和ふるさと協議会であります。もう頼れるものはない。住民自らが考える地域づくりを目指すということであります。その合言葉として『里山の恵みと人の輝くふるさとづくり』、続いて『君の自立、ぼくの自立がふるさとの自立』と二つスローガンを掲げました。それらをいかしながら地域を面的に共有すること、これが我々の地域づくりでありました。そんな中、青天の霹靂と言えることが起こってしまいました。昨日までとは違う今日を生きるために、固定概念からの脱却や変化を恐れない強い意志を持ってこれらに立ち向かってくる。

定義として、地域活性化という言葉がよく聞かれております。イベントで企業を誘致して、ITで地域活性化を、新幹線、高速道路を誘致してなどという声をよく聞きます。ところが、本来の地域の共通の目的は地域の存続そのものであります。地域の持続性を高めること、地域活性化を目指し、活動がどのように地域につながるのかを考えるというのが重要であります。自ら地域資源をいかし仕事をつくる、販路を拡大し、さらに空き家農地を活用し、Uターンを促進させる。改めて問う、地域づくり、地域活性化とは何かと。ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会にはそういったものがございます。

その結果、賞もいただくことができました。今度見ていただくのはこういった施設をつなぎながら見ていただきます。持続可能なための施設、これも昨年稼働しました。地域交流を目指す農家民宿を25軒で行っている。また、新規就農者、移住者の交流についても力強く行われております。地域では、ゆうきの里のビジネスモデルを参考に、震災で、売れなくなった地元リンゴを使ってシードルを作ってワイナリーを開業したおやじたちもいます。そのような事例も楽しみに見ていただければと思います。

第3分科会



それでは第3分科会より皆さまへ、郡山市における地域づくりの歩みと郡山市ブロック会議の取り組みについてご説明させていただきます。

郡山市は福島県のほぼ中央に位置し、人口33万人あまりと、いわきに次いで福島県内で2番目に人口の多いまちです。郡山市の中央を奥羽山脈が縦断し、西側が豪雪地域、東側が小雪地域の多彩な気候で、魚のコイや地域ブランド野菜など様々な産品に恵まれています。そして、4年前の2014年には市制施行90周年、合併50周年を迎えました。また、今から約60年前の1958年当初には、NHK交響楽団演奏や東北一の規模となる市民会館の誕生、日本最大級の野外コンサートも開催され、現在においても管弦楽や合唱、管楽アンサンバルが盛んで、音楽のまち楽都郡山は東北のウィーンとして広く知ら

れております。

郡山市は、東北新幹線や東北自動車道、磐越自動車道が交差し、人、もの、情報が集まる福島県の経済県都としても広く知られております。しかしながら、歴史的にはまだ浅い、ほんの150年ほど前までは街道沿いに小さな集落がある、乾いた荒れた土地が広がる地域でした。現在の郡山市の発展は、当時の25人ほどの商人が私財を投じ、市民主導による灌漑用池建設や開成社を設立したことに始まったと言えます。開成社の由来は『開物成務』という中国古書にあり、万物を開発して事業を成し遂げるという意味があります。開成社の開拓活動は2年のうちに国の認定や県の表彰を受け、そして次に説明します安積疎水開削の大工事を始めました。

さて、まず安積疎水開削の前に安積開拓のほうから説明します。今から145年前、開成社は当時の郡山地域一円の荒地開墾である安積開拓を開始し、人々の続々の参加により規模を広げます。そして、この事業は国営開拓事業第1号に位置付けられています。その6年後にあたる1879年、オランダの土木技術者ファンダーロンを迎え、郡山発展の礎となる大工事、安積疎水開削を着手しました。完成水路52キロ、分水路を加えるとなんと78キロにも及ぶ大工事は、工事従事者のべ85万人を動員し、3年の時を経て1882年に完成。これらの大開削は一昨年前、2016年に未来を開いた一本の水路として日本遺産に認定を受けました。

私たち第3分科会は市民主導による開拓と安積疎水開削を見て学ぶこと。次にこれをきっかけにして始まった安積疎水伝承やその他さまざまな地域づくり、復興、ボランティアなどの活動を見て学ぶこと。そして、これらの活動をきっかけに生まれた産業を見て学んで味わう行程です。そして私たち第3分科会は、NPOや任意団体、企業、郡山市、福島県の協同による運営組織です。先日、私たちの活動は郡山市の日本の水路ブランド認証を受けました。今回の第3分科会の企画運営などを契機に、郡山の地域づくり団体のネットワークをつなぎ、さらなる活動の発展に結びつけていきたいと考えております。ご清聴ありがとうございました。

第4分科会



第4分科会三春町を担当させていただく株式会社福島ガイナと申します。よろしくお願いいたします。三春町の紹介と福島ガイナの取り組みと地域づくりの考え方ということで発表させていただきます。

まず、三春町の概況についてですが、三春町は福島県のほぼ中央に位置しており、郡山市、二本松市、本宮市、田村市の4市に囲まれた小さな町ですが、町の中心地は整備されており、裏通りに入ると蔵や伝統的な建築物が建立されているなど、もともとは城下町だったことから、そちらの趣が残っております。また、日本三大桜の滝桜で

すとか日本三大駒の三春駒などが有名です。蔵の活用について、三春町では通年観光の推進に向けた町中拠点として、城下町としての街並みを利用し、伝統建築物である蔵の活用を行っております。観光案内所ですとか物産、お土産、カフェ、また弊社のアニメスタジオも蔵を利用しています。

そもそも私たちの会社、福島ガイナとはなんぞやというところですが、平成26年にできたばかりで、株式会社福島ガイナックスと申しまして、旧桜中学校、廃校になってしまった所にアニメスタジオとミュージアムを設立いたしました。今年の8月には、株式会社ガイナという名前になりました、福島での活動は株式会社福島ガイナということでミュージアムの管理運営を行っております。具体的にどういう経緯で建てられたかということですが、こちらに書いてあるとおり、エンターテインメントの産業を福島に生み出すこと。雇用を生み県外への人口流出を抑え、新たに若い人を呼び込むこと。震災後、福島県には避難によって使われてない施設が多々あり、それらをミュージアムとして活用することで新たな情報発信と観光拠点にすること。イベントの明るい話題を出してイメージアップを図り、楽しそう、面白そうと福島に興味を持ってもらうこと。福島県の逸話や伝承をアニメ化することでファンを獲得し、福島を知ってもらうきっかけをつくることを目的としております。

実際にどういう活動を行っているのかといいますと、先ほど申しましたミュージアムの運営管理、イベントの運営、そしてアニメーションの制作をしております。こちらにありますのが代表的なところになってきます。実際に自治体とどういう取り組みをしているかということで、アニメーション制作ですとかイベントの企画を定期的に行っております。こちらにありますのは、福島県の伊達市とコラボしたアニメや、福島県産の野菜ですとか果物を擬人化してアニメにしました『食べちゃったっていいのに!』というものがあまして、今、YouTubeで、1000万回ぐらい再生をしていただいております。自治体との関わり方につきましては、ちょうど先月、秋祭り、三春のポスターなどの製作や、三春町内外の小学校や中学校に向けたアート教室も行っております。

これからの課題は、近年アニメで町おこしというものがかなり大きくなっていると思うのですが、埼玉県や茨城県など、他、多々あるんですが、やはり私たちが考えるというのは、自治体とやっこうと思いますので、こういうものを分科会でいろいろ提示できたらと思います。よろしくお願いいたします。

第5分科会



皆さん、こんにちは。第5分科会を担当しています鮫川村のNPO法人あぶくまエヌエスネットの進士と言います。風邪をちょっと拗ら

せまして、もう治りかけですけれども、用心してマスク着用でお許しください。名前が進士なんですけど、紳士な顔をお見せできなくて本当に残念に思います。すいません。冗談です。

私たちの位置ですけれども、ここがJヴィレッジで、県南地域といわきの中心からちょっと外れた山間高冷地の位置になります。目立った観光地は全くありません。そんな所で元氣な農業に取り組むグループや個人を皆さんにご案内させていただければと思っています。共通する農山村の課題は多々ありますが、皆さん本当に元氣と笑顔を忘れずに日々取り組んでいるメンバーです。信念を持って、何があってもポジティブに夢と希望を持っていこう。農業って楽しい、最高の分野である。笑顔と健康を維持していこう。風邪ひいちゃいましたけど、すいません。あとは次世代の子どもたちに体験学習の場、特に命の教育っていうことを日々実践している。そんな元氣を発信していると、自然とマスコミも注目してくれてるってところです。

これからは案内していただく関わりのある人の活動を紹介します。まず初め、楢葉町出身の橋爪弘子さん。ギャルケロサミットというギャルケロのマスコットを考案して、震災後のチャリティーを数多くゆったりとか各地で活動をして、こういうマスコミ報道も多々あり、まさかのときの講座も幅広くやっている、そんな橋爪さんです。あと、古殿町。ここは今日最初に訪れる所ですけれども、おざわふあーむという家族で精力的にやっている、凍み餅も大量に作って全部完売しちゃうんですね。すごい軒下に連ねてっという。これは馬耕ですね。春先の代かき、今やNPOでこういった伝統文化を子どもたちにも伝えたいっという、そういうのにも関わっています。そういった取り組みが評価されて、昨年度、福島県の農業大賞をご夫妻で受賞されたりとか、所さんの番組に出演されて、デヴィ夫人の特別なシール付きのサインをもらったっという喜んでました。次は鮫川和紙。これは齋須寛一さんですけど、役場を退職後、こういう伝統文化、星さんっていうもう亡くなられましたけども、そういうのを維持していこうと頑張っている方です。

あと、蛭田さんですが、今日の2次交流会のときに健康食を砂糖を使わないで出してっというのを皆さんに提供させていただきま。各地でこういう健康食の講座を持ったり、これは鹿角平という日本で3番目に星空が見える鮫川村ですが、そういった集まりを個人的にイベントをやったりとか、これは明日の朝ですけれども、いわき市の貝泊地区コイコイ倶楽部で、この人が蛭田一さんってエンターテインメントなんですけども、女子大学生との交流だったり、これはいろんな視察をやったりとか、昨日は農林水産大臣賞を受賞して表彰を受けたという。これは、つばさファームという、20代後半の若い青年がジャージー牛を使って精力的にやっているという。若いうちのスタッフも田舎暮らしに定住して頑張っているところです。以上でございます。

第6分科会



皆さん、おはようございます。それでは第6分科会、一般社団法人IORI倶楽部の活動報告させていただきます。

私たちの活動拠点である三島町は日本で最も美しい村連合に加盟している山間の町です。これは尾瀬を水源とする只見川に掛かる夏の川霧の様子です。ローカル線で人気で、只見線のベストショットの写真ですね、これは。この風景を見に大勢の人が訪れてくれるんです。三島町は会津編みの産地でもありまして、桐たんすは町の特産品になっています。米はなんといっても天日干しということで、昔ながらのこういう稲架掛けにこだわった丁寧な暮らしをされている方が大勢いらっしゃる。これが冬の様子です。ちょっと目を離すと、本当に一日で積もったりしまして、笑っちゃうほど雪が降るような豪雪地帯でもあります。これは縄文乙女っていう土偶ですが、これは町の荒屋敷遺跡っていう所から出土したものです。今でも三島町にはこの縄文乙女の末裔の方々が大勢住んでいらっしゃるということです。こういう漆塗りの糸玉っていうものも出土しています。縄文時代から続く、草木を使った編み組細工といいますが、国の伝統工芸品に指定されています。

このような地域で、私たちは地域と共に生きるための持続可能なライフスタイルを創造するということをミッションに掲げて活動しております。三島町というのは地図で見ますとここです。私たちのIORI倶楽部の会員は、会津の広域にわたって住んで生業を営んでおります。このように様々な職業の方々が集まっておりまして、最近ではますますいろんな職業の方々が仲間に加わってくれています。現在、46社の方々と一緒に活動を行っているんです。これが私たちのコンセプトハウス、このような住まいを提供していますが、これが活動の中心拠点になっています。只見川のほとりに付んでいます。今日の交流会はこちらで行います。

山の仕事を学ぶ場も提供しておりまして、それから左下のほうは手づくりの広報誌です。震災のときには、グループ全員で総力を挙げて木造仮設の建設プロジェクトを行いました。仮設としての使命を終えた後も、全くごみにしないで使い続けられることをコンセプトにしています。今年の7月の西日本の豪雨災害の後ですが、総社市のほうから依頼を受けまして、いわきに建っているこの仮設をいわきで解体して、24棟48世帯を総社市に移築する大プロジェクトを行いました。そのときは大工が足りなくて、全国から集まっていたいて、いわきと総社市で相当の人数の大工さんが全国から加わってくださって何とかやり遂げることができました。震災以降のいろんなこういう活動を、実は今年グッドデザイン賞いただけるような評価をいただきました。

それから、会津には多くの古民家がいっぱい残っているんですけれども、これらを再生するようなプロジェクトも行っています。これらの

プロジェクトによって、実はいろんなご縁が生まれてきています。そして、さらなる空き家対策のいろんな事業に広がりを見せてきています。そのときに、私たちいろんな活動やっているんですが、その場で価値の共感が自然と生まれるような場をつくるっていうことを極力心がけています。それから、先ほどの展示場は移住者の仲間が入ってきて、今、カフェになっています。それから、このようなリノベーションのお手伝いもしています。これは空き店舗を交流拠点にするお手伝いをしたりしています。

これが、私たちが今、実は関わっている活動を見える化してマトリックスにしたものですが、ものすごい、こういう広い内容になってきました。実はこれらの活動を今後どういうふうに育てていくかが我々の課題です。ありがとうございました。

第7分科会



第7分科会のカスミソウとからむし織の里昭和村、こちらの地域づくりについてご紹介させていただきます。私、昭和村から参りました本名と申します。

昭和村はご覧のとおり、周囲を1000メートル級の自然の屏風に囲まれた、人口1200人、小さな農山村です。福島県の西側、会津地方のほぼ中央に位置し、首都圏に非常に近い位置ですが、なぜか奥会津と言われております。また、奥会津と言われるだけに四季の変化がはっきりしていて、なんと青森県で桜が開花しましたというときに昭和村の桜が同じく開花します。現在は紅葉シーズンも終わり、雪景色の到来を待つばかりで、降雪量は10メートル、積雪は2メートル、これが平年の降雪。特別豪雪地帯に指定されております。

こんな昭和村には、大きな二つの地域資源があります。一つは300年以上も昔から栽培が続けられている「からむし」、本州唯一の生産地であります。二つ目が夏から秋に首都圏で販売され、約7割のシェアを誇っておりますカスミソウの生産地です。昭和村は昭和2年に二つの小さな村が合併し、当時の年号にあやかり昭和村が誕生いたしました。昭和30年、村の人口は4810人と多くの記録を残しましたが、現在、当時のなんと4分の1、1200人足らずと、高齢化率も56パーセントと全国で7番目に高い、このような状況を踏まえて、このままでは村の存亡が危ういということで、先ほど申し上げました地域資源、これを活用した新たな地域づくりを確立してきました。歴史あるからむしを題材に、平成6年度からからむし織体験生、通称織姫、これを全国から公募して後継者育成として事業を展開しています。また、カスミソウにつきましては、栽培の後継者育成、確保ということで、平成15年から空き家の解消も踏まえて新規就農者の確保を展開しております。今現在、なんと1ターンで入村されている方々が3割程度、新規就農者ということでもあります。

からむしとはどういうものか。これはイラクサ科に属する多年草植物で、その食物繊維はユネスコ文化遺産、新潟県の越後上布、それと小千谷縮の原料として、今でも昭和村から出荷されております。また、昭和村の生産技術は国の選定保存技術に、村で織られた製品は、昨年末に奥会津昭和からむし織として国の伝統的産業の指定を受けたところでございます。

この伝統文化産業であるからむし織を体験する織姫事業は、からむしに携わる村のおじいちゃん、おばあちゃん、これが指導員です。本年度春までに、全国各地から117名の方々を迎え入れ、今年の3月末、107名の方々が1年間のスケジュールを終えて、うち30名の方が今も昭和村に残って活動しております。裏話ですが、なんと12名の方々が嫁さんになっていただいて、小学校、中学校の児童生徒の3分の1が織姫の子どもで占めているという状況です。また、カスミソウ新規就農者の受け入れに関しては、高齢からカスミソウ栽培を辞めたいんだと、誰かやりたい人はいないか、畑は貸せる、農機具も譲りたいというご相談を受けたことに端を発して、栽培はできなくとも指導はできるだろうと、一生懸命におじいちゃんにお願いして、雪国でも十分に生活できる農業収入があるというPRを行って、毎年数組の方々を新規就農者として迎え入れています。現在の就農者受け入れは、生産農家の方々が常に勉強会を開催して、新たな就農者の指導員として活躍されております。

このように昭和村の地域づくりは、行政だけでなく、関係機関を始め、村民の方々一同に介して取り組み、織姫事業でも申し上げましたが、生活の知恵、技を持つ高齢者が中心です。ご清聴ありがとうございました。

第8分科会



第8分科会、この地図の印象にあるとおり、山が大変広がっていて、もしくは山しかないようなエリアです。山しかないという役場の人に怒られてしまうので、あるものをちょっと説明させていただきますと、アスパラや南郷トマト、特産品としてとても有名で、それを使ったトルティーヤというB級グルメもあります。あと、それらに合う日本酒や地ビールも最近工場ができました。他には伝統的な神事や芸能があったり、温泉があったり、そばも有名なのでそばに関するイベントがあったり、サイクリングができたり、うちの団体が企画していますアロマ祭りがあったり、野外音楽フェスがあったりします。あと、自然が豊かなので四季折々を楽しむこともできます。

僕たちのNPOがある針生地区という所も、写真のとおり山の中にありまして。かつて、江戸時代は交通の要所だったらしく、黄色の線が書いてあるような動線が昔あったんですけど、今は太い動線の2本にしか通り道はありません。あと、林業が盛んで、集落に今、一頭もいな

いんですけど、昔は馬が100頭ぐらいたらしくて、皆さん、その馬で木を切って出していたみたいです。これが今の針生地区で170世帯ぐらあります。今、民宿とかペンションが多いですけど、こういった針生にあるフィールドを活用して、どちらかというと観光地的な、お客さんを受け入れるような集落になっています。僕たちの針生集落の最大の特徴の一つは、地元の工務店さんが、木が周りにいっぱいあるので、その木を使ってログハウスを約35年間かけて100棟ぐらい、集落とその周辺に造ってきまして、定住移住をずっと促進してきたという背景があり、今、そこに二地域居住だったり別荘的に使ったり、終の住まいとしても高齢になった人が住んでいたりもします。

僕たちのNPOは2013年にできたんですけど、そういった外から来る人たちと、もともと内部の集落にいる人たちをつないで、いろんな活性化事業ができないかとか、住んでる人たちの生きがいというか面白い何かができないかとか、そういう事業に取り組んでいます。

これからは私のほうで説明します。私たち、南会津の針生地区で、二つのキーワードを基に活動展開しています。一つは先ほど説明がありました人材、二地域居住だったり1ターンやUターンの方をいかに取り組み。もう一つは、あれだけ地図でご覧いただいたとおり森林が広がっている里山地域なので、そういった森林資源をうまく使えないかということで、そういった活動に取り組んでおります。

まず一つ目の人材ですけども、二地域居住ということで、約35年前から二地域居住の方々に土地を貸してあげるっていうことで、逆にその土地を手放さないとということで、借りたほうと貸すほうの方々の交流をずっと継続することで、外から来た方が孤独にならないような仕組みを二地域居住ではやっております。1ターンとしましては、地元の工務店だったり設計会社、また、新規就農だったりスキーやスノーボードを極めたいという方々がたがここ最近、毎年数人ずつ増えており、針生区の小学校、閉校になったんですけど、昨年度は1年生に上がる学年が10人になるほど人口が増えております。

もう一つ、資源の活用ですが、森林資源といっても非常に多岐にわたっておりまして、全てチップにしただけエネルギーにしようではなく、しっかりと森林資源の用途に合わせた使い道を探っていこうということで、このように様々な森林資源の商品化を展開しております。その中でもアロマというものに、私たちは新しいビジネスチャンスを見いだしまして、このように森林資源からアロマオイルを抽出したものを展開しております。こちら辺を分科会では中心に広げていこうと思います。ご清聴ありがとうございました。

第9分科会



あすびと福島半谷と申します。南相馬ソーラーアグリパークを本拠にしています。私共の地域づくりは、その本質は人づくりという

志で、この7年間前進を続けております。Jヴィレッジから見ますと、福島第一原子力を中心にとすると、北と南に20キロほど離れた関係にあります。

私は2010年まで、この福島第一原子力、事故を起こしました東京電力の役員の端くれを務めておりました。私には原子力の事故の責任があります。本当に申し訳なく思っております。生涯背負い続けなくちゃいけないという思いです。一方、私は1997年にオープンしたJヴィレッジのプロジェクトにはゼロベースから関わりまして、7年間Jヴィレッジの事業をさせていただきました。そしてもう一つ、私は南相馬市の生まれ育ちです。南相馬を中心に、福島の人材育成が福島の新しい価値をつくるという志を抱いて7年です。2011年の3月に東京から支援物資を運びました。その役目は5月ぐらいに終わったんですが、やはり長い時間のかかる福島の復興、地方創生です。人づくりが大切だという思いを、この2011年の5月ぐらいに強く持ちました。

おかげさまで、国、県、南相馬市の皆様のご支援で、2013年の3月11日にはパークを完成しました。そこからもう5年以上たちますが、南相馬市の小学校、中学校、3400名のうち、もう既に3000名以上が学校の授業の一環として体験学習に来てくれています。東京と大阪にあるキザニアと連携して、この体験学習を進めています。小中学生が、もう5年たちますので高校生になります。国、県が進めている福島イノベーションコースト構想を、Pepper君を使って、交流人口を拡大するための理解促進活動を、私共が地元の高校生たちと進めています。こうやって地域の可能性に高校生たちの成長を組み合わせるような、そういう人材育成のあり方が私共の特徴です。

福島県内の高校生は、福島に向き合う、福島に新しい価値をつくる、そういう思いの高校生がたくさんいます。毎月1回、福島市であすびと塾を開いてもう40回近くになります。その高校生が生み出した社会的事業の一つに、高校生が伝える福島食べる通信があります。3カ月に1回、福島の農家さんの思いを全国の読者、北海道から沖縄まで700名もいらっしゃいます、この方たちに福島の農家さんの思いを伝えます。その思いを伝えるために、高校生たちが努力をして、それが高校生たちの成長につながります。おかげさまで、大学生も生まれまして、今、フロントランナーは大学3年生です。主に東京に集まっています。東京にいなから福島に向き合い続ける、そういう人材育成のあり方をチャレンジしています。東京だけではありません。宮崎大学の農学部に進学している学生もいまして、月に1回、この大学生あすびと塾に通っています。PwCというコンサルティング会社と連携して、いろんな経営的な要素を大学生たちが学び始めています。

私たちのスタッフは地元出身者、Uターン、Iターン、企業の出向者からなっています。来年の1月にはもう一人Iターンの人材が入ってきます。憧れの連鎖っていうものを生み出そうとしています。社会起業家が生まれる、必ず子どもたちもそうだろうと憧れの連鎖が生まれる。こうやって福島に人材が育ちます。

私のどもの特徴のもう一つ、どうやって収益を上げているか。この緑色の部分の企業研修です。去年は4500万ぐらいになっていますが、小学生、中学生、高校生、大学生は無料。社会人研修は有料です。こんな会社の方たちがいらっしゃっています。分科会の皆さんには、この社会人研修のカリキュラムを体験していただきます。ありがとうございます。

第10分科会



皆さん、こんにちは。檜葉町のまちづくり会社、一般社団法人ならはみらい職員の牧ノ原と西崎です。

震災から7年半がたちますが、檜葉町の暮らしに切っても切り離せないものが原子力災害です。私たちの地域づくり、まちづくりについてどういう経緯で今に至るかを簡単に説明しながらお話しさせていただきます。

皆さん、檜葉町がまずどこにあるか分かりますでしょうか。そう、ここです。皆さんが今いるこのJヴィレッジは、檜葉町と隣町の広野町にまたがって位置しております。檜葉町の名物といえば、昨日、全体会で皆さんにも食べていただきましたマミーすいとん。このJヴィレッジで当時サッカー日本代表を率いていたトルシエ監督が、ふるさとのおばあちゃんの味だと名付けられました。その他にも、この時期が旬の木戸川のサケやゆずが檜葉町の自慢となっております。

そんな檜葉町ですが、2011年3月11日の東日本大震災で地震、津波、原発事故、この三つの複合災害に見舞われ、大きな被害に遭いました。事故があった福島第一原子力発電所から約20キロ圏内に位置する檜葉町は、震災の翌日12日に全町民が避難しなければならぬ状況になってしまいました。檜葉町の被害状況がこちらになります。とにかく南へと原発から離れる方向に避難するように指示されまして、多くの人は自家用車で着の身着のまま避難しました。いわき市や姉妹都市の会津美里町を中心に、全国の方々に避難を受け入れていただきました。受け入れていただいた自治体の皆さん、本当に感謝申し上げます。しかし、それから約1年半は許可を受けなければ地元ふるさとの自宅に戻ることができない状況が続きました。約8000人の町民が全国に避難をして4年半がたち、平成27年9月5日に全ての避難指示が解除になり、ふるさとでの暮らしがやっとできるようになりました。そこから一つ、また一つと暮らしが戻り、現在では震災前の約半数の方が檜葉町で生活するようになりました。

全ての避難指示が解除になり約3年、現在の檜葉町にはふるさとに戻って暮らし始めた人、新たな場所で暮らし始めた人、震災後に住み始めた人、さまざまな立場の方々がいらっしゃいます。その中で私たち、ならはみらいは住みよい暮らしとなるよう、様々な取り組みを行っております。

ならはみらいは、震災後に行政の出資で設立されたまちづくり会社です。檜葉町がより魅力ある町になっていくように町外からの応援や共感を獲得しつつ、町民自身がまちづくりに主体的かつ積極的に関わっていくため、きずな、安心、活力の三つの軸のもと事業を行っています。

私たちの主な取り組みを紹介します。一つ目に町内のきずな再生

と生きがいづくりのため、町民の趣味のサークル等の活動サポートや、町内の企業団体間の密な連携のためのつなぎ役としての役割を担っています。二つ目に生活再建と安心できる暮らしに向けて、行政区、つまりは自治会活動の再生のサポートやきっかけづくり、行政からの委託事業や生活再建に向けた相談窓口などを行っています。三つ目に町外とのつながりづくりや活力ある地域経済の再生に向けて、ボランティアの受け入れや、被災・復興状況の案内事業を行っています。これらの取り組みを通じて最も大切なこと、それはまちづくりの主役は「人」だということです。自分たちで育てた藍の葉を使って藍染めを楽しむならは藍染会の皆さんや、檜葉町民が誇る木戸川のサケを戻すため、津波で被災した施設の復旧に加え、安全安心に向けた取組に奔走されている鈴木さん、町外から定期的に檜葉町に通う学生さんなど、たくさんの小さな動きが町をつくり、その動きを大切にしています。

檜葉町は一度は誰もいなくなった町です。複雑な課題がたくさんありますが、立場を超えて一人一人がまちづくりの担い手になれるよう、暮らし、気付き、つながり、そしてチャレンジを大切に町をつくっていきます。この大会が、福島と聞いて顔を思い浮かべることができるような人との出会いがあるような機会であればと思います。以上です。ご清聴ありがとうございました。

第11分科会



長かったプレゼンもようやく最後でございます。もう一頑張りです。

未来会議と申します。いわき市の分科会です。いわき市、浜通りの一番南の町、東京23区2個分の広さがある、なおかつ福島県内でも一番人口の多い町であります。

われわれの活動、実は任意団体で、特にまちづくりという意識もなく、全員が手弁当ボランティアで活動しています。なぜ私たちがここに呼ばれているのかまだ分かっていない状況ではありますが、でも、我々の活動の始まりは2012年頃でした。ご存じのとおり、2011年に震災があり、原発事故が起き、いわき市には双葉郡から住めなくなった、たくさんの方たちを、仮設住宅、みなし仮設住宅等に受け入れました。その数2万人以上と言われておりまして、また復旧作業であったり除染の作業であったりに関わる方、ピーク時には1万人を超える方が寝泊まりしたと言われてます。住民票がない方がその規模で同居した町でもあります。その頃、コミュニティの混在であったり、われわれも放射能の汚染を受けて避難する、しないの悩みがあったり、私も小さい子どもがいて非常に悩みました。そして、例えば食べ物も福島のもの、その頃食べさせ

ていいのかな、悪いのかな、非常に悩みました。津波で被災した方、原発で避難をされている方、いろんな格差があり、保証金、賠償金の受け取り方によっていろんな分断が起きていった、そんな中で、どうも暮らしにくさを感じていた時期でした。

その中で、私たち発起人になったメンバーもたまたま対話をする場というのを経験いたしまして、その場にはファシリテーターという進行役みたいな方がいて、ルールにのっとって言葉を交わす場、そういうのを体験して、これとてもいいぞ、これ続けたらまた何か起きるんじゃないのかな、そうして始めていったのがこの活動です。なので、私たち対話の場づくりをしていますというふうに紹介をしています。何よりも価値観の多様さ自体を大事にしようよ、違うことが当たり前で宝だね、それを大事にしていきましょう、そして、議論ではなく対話をしましようと言っています。意見をぶつけるのではなく、お互いがお互いに耳を傾け合って、そしてお互いが変化し合おう、そういうことをやっています。そしてまた、集まる方たち、非常にとても素敵な方々が多くて、この方々同士がこの場で出会って、また次の活動を次々始めていく、そんなことも起きています。

2013年に始まり、14年、本会議と呼んでいる大きな場では「誰でも来ていいですよ」って言ったら、100人オーバーで集まるような会が繰り返されております。そして、2015年にもやりまして、このときには縁ありまして、阪神淡路大震災から20年たった神戸のKIITOでも同じように対話の場をさせていただいて、震災20年を経験された先輩方から間もなく4年になろうというわれわれとの対話、そういうものもやらせていただきました。2016年にも続きまして、去年は浜通り合衆国という、またちょっと一風変わったタイトルでの場を続けておりまして、今まである自治体の梓自体がどうも邪魔っばい、だったらその境目自体を一回忘れてみたらどうなるだろうということで、まずは手始めに浜通りをつなげたら何が起きるのかなということでの対話をやってみました。実はこの着ている法被もプロジェクトの中から生まれた、よさこいチームつこうぜというプロジェクトがありまして、そこから借りてきている法被です。浜通り合衆国というのもし片隅においていただけたらと思います。

また、派生した分科会としては、お酒を飲みながら面白い人を捕まえて話を掘り葉掘り聞いちゃおうという分科会があったり、学童クラブや学校でのいわゆるアクティブラーニングのお手伝いなんかを受けてみたり、広域避難で、特に愛知県と栃木県に福島から避難されている方の対話の場づくりをお手伝いしたり、まちづくり未来会議といって、今回分科会のファシリテーターとして山口寛さんという福岡県津屋崎町を拠点に活動されているファシリテーターの方のお世話になる会議なんかもやっております。

『対話で育てるそれぞれのいま・未来』というのを今回のテーマにさせていただきました。議論は結論を出すため、でも、対話は続けるためにするものという言葉をお願いしております。また、答え自体を急がずに保留しておく、いつしかその答えが見つかっていく。また、違ったものとの出会いというのは、共感をその場でできなくても共有をしていくことはできるじゃないか。いろんな気付きを得ております。今回皆さんをご案内してたっぷりお話ししたいと思います。ありがとうございます。

第1分科会 福島市

温泉と再生可能エネルギーで復興再生へ

～地域住民との合意形成の中で生まれた新たな産業とまちづくり～

土湯温泉町地区まちづくり協議会



福島市長・福島市議会議長らとの交流会

開催趣旨

●分科会のねらい・概要

2011.3.11の東日本大震災と福島第一原子力発電所事故は、主力産業である旅館が軒廃業してしまい、土湯温泉町の将来の生活に不安を与える出来事でした。この不安の中で、地域住民がどのようにして復興と再生に向けて動き出し、そして具体的にどのようなまちづくりを進めてきたのか、その経過と現状を報告するとともに、少子高齢化や空き家対策等の課題解決について参加者と意見交換を図ることをねらいとしました。

●第一分科会での講演会の様子

講師 土湯温泉町地区まちづくり協議会
会長 加藤 勝一

参加者17名、地域内団体10名

行政関係者11名 計38名が参加



3.11の災害発生直後から福島市と行う都市再生整備計画事業に至るまでの経過と現状、そしてこれからの課題について講演しました。

●第一分科会ワークショップ

38名が4グループに分かれて、「少子高齢化・人口減少社会の中で地域はどう取り組むべきなのか。」をテーマにディスカッションしました。終了後にグループの代表者から報告してもらいました。短い時間の中だったので、十分な交流まではいかず大きな反省点でもありません。

●温泉施設とバイナリー発電所(地熱発電)

土湯温泉町から約3Km上流にある共同源泉施設と地熱発電の一種であるバイナリー発電所設備です。この共同源泉から温泉街へ毎分1600L供給すると同時に毎時400Kwの電気も起こしています。土湯温泉の復興再生のシンボルとも言えます。

プログラム

1日目【11月17日】

12:00	全体会場出発
12:30	相馬市尾浜にて昼食(みなと屋)
13:00	松川浦大橋
13:30	相馬市鎮魂伝承祈念館(語り部)
17:15	山水荘(第一分科会会場)
17:45	講演会・ワークショップ
19:00	交流会
21:30	夜なべ談義(自由参加)

2日目【11月18日】

8:45	山水荘出発
9:00	バイナリー発電所・エビ養殖場視察
10:00	小水力発電所視察
10:15	こけし絵づけ体験・エビ釣り体験
11:45	復興再生整備事業視察
12:00	土湯温泉出発
12:30	昼食(ゆずの沢茶屋)
13:20	四季の里にてアンケート記入・施設見学
13:40	四季の里出発
13:55	こころ吾妻
14:20	JR福島駅到着、解散

1日目【11月17日】

実施概要

第一分科会会場まではJヴィレッジから約220Km離れています。その移動区間にある福島の復興の姿を少しでも多く見ってもらうため、放置されたままの農地を見る事ができる常磐自動車道を相馬市へ北上し、相馬市での津波発生時の被害やそこから立ち上がってがんばっている姿を垣間見てもらいました。その後、部分開通している福島復興道路を走行しながら、着実に復興へ進んでいることを参加者の皆さんに知ってもらいました。



●相馬市で語り部を務める五十嵐ひで子さん

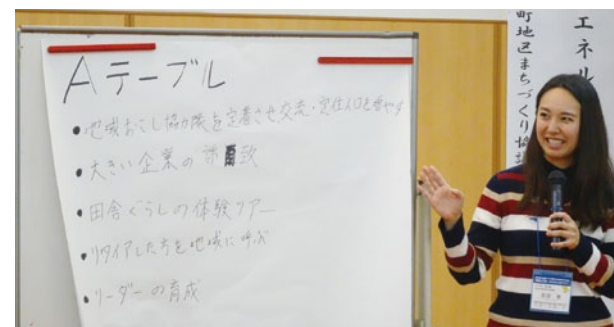
五十嵐さんは津波発生時に夫と叔父の3人で津波に呑みこまれましたが、夫と叔父は帰らぬ人となってしまいました。最初は絶望したものの、今はあの出来事を後世に言い伝えることが自分に残された使命であると言っていました。



●相馬市尾浜での昼食会場

福島の魚は安全でおいしいことを参加者の皆さんに知ってもらうために相馬市で昼食をとりました。この食堂も津波発生時は2階まで海水が押し寄せましたが、かろうじて建物が残りました。昼食は相馬市特産のカレイ定食でした。皆さん海の幸に満足でした。

ワークショップは「少子高齢化・人口減少社会の中で地域はどう取り組むべきなのか。」をテーマにディスカッションしました。参加者の皆さんからは、地域おこし協力隊員の定住化促進、田舎体験ツアーの実施、リタイアした方を呼び込む政策、若者が暮らしやすい応援制度、若者が活躍できる場の提供、地域内のコミュニケーションづくり、地域を引っ張っていくリーダー育成が大事などなど様々な意見が寄せられました。



●Aグループからの代表者発表

鳥取県、兵庫県、香川県、福島県で構成されたグループ。地域おこし協力隊員の定住化促進や地域内のリーダー人材育成が大切と発表されました。



●Bグループからの代表者発表

兵庫県、埼玉県、広島県、福島県で構成されたグループ。来年開催される兵庫大会実行委員長がいるグループでした。地域資源の再発見や若い世代の活用、若い人(夫婦)たちが住みやすい環境づくりが大切。少子化が進む中での学校の統廃合においては、幼保一元化も必要ではないか。

分科会交流会では福島市長、福島市議会議長をはじめとして、土湯温泉観光協会の顧問である衆議院議員、福島県議会議員、福島市議会議員など7名の来賓にも参加いただき、賑やかに開催されました。交流会では参加者1人ずつ自己紹介や自分の地域の紹介などをしてもらいました。地元養殖のエビ料理や福島市特産のりんごなども料理として出され、多くの参加者の皆さんが食事をとりながら交流を深めた夜となりました。

2日目【11月18日】

実施概要

温泉を供給する共同源泉でのバイナリー発電所とエビ養殖施設、そして小水力発電所を視察しました。地元団体の出資で(株)元気アップつちゆを設立し、地域にある資源を最大限に活用した再生可能エネルギー事業を立ち上げ、新しい産業と雇用を生み出してきました。売電で生まれた収益を住みやすい町とするために子供たちには給食費とバス定期券の全額支援、高齢者(70～75歳)へはバス定期券の全額支援をして還元しています。



バイナリー発電所施設



エビ養殖展示水槽



小水力発電所施設

土湯温泉の古くからの伝統工芸である土湯こけし絵づけ体験と昨年の夏から始めたエビ釣り体験をしていただきました。こけしの絵づけ体験は土湯こけし工人の指導を仰ぎながら体験しました。エビ釣り体験はなかなか釣れず悲喜交々でした。



●こけし絵づけ体験

こけし絵づけ完成品を持ちながらの土湯こけし工人との交流



●エビ釣り体験

えび釣り堀にて釣り上げたオニテナガエビ

土湯温泉では平成26年度から5年間かけて福島市と連携して都市再生整備計画をすすめてきました。この5年間の間に廃業した旅館等の跡地に新たな公衆浴場、まちおこしセンター、観光交流センターを整備し、持続可能な観光地づくりを進めてきました。



●公衆浴場「中之湯」前

廃業した旅館の跡地に土湯温泉のランドマークとしてリニューアル整備した公衆浴場広場です。横には足湯きぼこの湯も設置されています。



まちおこしセンター「湯楽座」(工事中)

廃業した旅館をリニューアルして観光案内所や売店、レストラン、コミュニティールーム、研修宿泊施設等を平成31年3月までに整備予定です。

分科会全体をとおして

分科会を振り返って

Jヴィレッジから第一分科会までの移動区間において、参加者の皆さんに福島県の今の姿を見ていただくにはどうしたら良いか検討を重ねてきました。その中で、相馬市鎮魂伝承祈念館での五十嵐ひで子さんの語りは、参加者の皆さんの心に福島県の人々の悲しみ、驚き、前を向いて生きて行こうという強い意志を感じてもらえたのではないかと思います。

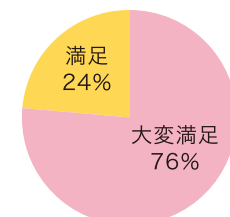
第一分科会会場に到着してからは、町の復興再生に向けて一緒に取り組んで来てくれた地元の方々の参画と福島市挙げての応援参加のお蔭で、参加者の皆さんとの意見交換や交流も深まり、有意義な分科会を実施できたと安堵しているところです。

参加者の皆さんからは土湯温泉のまちづくりが「元気があり、大変参考になった。」という言葉がたくさんいただきました。この言葉は今回の分科会に限らず、震災後から今まで取り組んできた姿勢に対していただいた言葉と理解し、これからも持続的なまちづくりに取り組んでいくためのモチベーションアップとなりました。

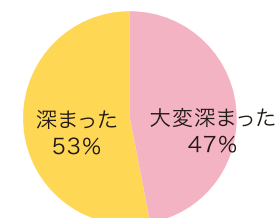


相馬市鎮魂伝承祈念館にて

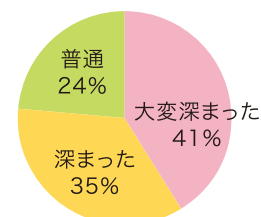
参加者アンケート紹介



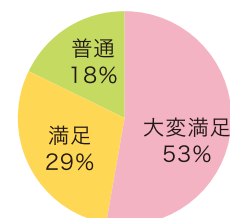
分科会に参加しての
全体的な感想



参加者との交流は
深まったか



地域との交流は
深まったか



食事は美味しかったか

意見・感想・提案

- 土湯のまちづくりが元気があり、大変参考になりました。
- 福島県の現状のことが良く理解できました。
- 来年はぜひ兵庫大会にお越しください。
- 土湯温泉の問題点も話し合うことができました。
- 地域と行政が一体となり、新規事業を展開していることを知り参考になりました。
- 多くの規制をクリアしたり、新しいアイデアの発想はリーダーの存在が大きいと実感しました。
- 自由休憩あると良かったです。
- 自分の知らない土湯を知れて、さらに福島が好きになりました。
- 各プログラムに時間のゆとりがほしい。
- 終始、和やかな雰囲気楽しく学び交流させていただきました。
- 震災時の話しやバイナリー発電など大変ためになりました。
- 地元愛が伝わってきました。
- 地元の人との会話時間がもう少しほしかった。

里山の恵みと人の輝くふるさとづくり

～今活かそう！資源は地域に埋もれてる～

(特非) ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会



開催趣旨

自分たちの地域には多様な資源があるにもかかわらず、他地域のことに目移りし、魅力ある資源を見逃していることが意外に多いと思う。これが地域の宝である資源だと気づくことが大切であり、それを誰がどのようにアピールしていくか、形にしていけるかをテーマとして第2分科会を開催した。二本松市東和地域にある資源を活かして自主的な取組を展開している事例について現地を見てもらい、これらの評価を参加者のみなさんが地域に持ち帰り、具体的な取組に移行できるかなどを考えて頂くことができた。



プログラム

1日目【11月17日】

- 12:20 Jヴィレッジ移動(車中で取組説明、昼食)
- 14:00 道の駅ふくしま東和 到着
オリエンテーション
- 15:30 桑加工所 案内
- 16:00 堆肥センター 案内
- 17:00 ふくしま農家の夢ワイン 案内
- 18:00 ワイナリーで交流会
- 19:40 農家民宿へ移動
- 20:00 各農家民宿で夜なべ談義

2日目【11月18日】

- 8:40 道の駅ふくしま東和 集合
- 8:50 道の駅 出発
- 9:00 リンゴ収穫体験
- 10:00 道の駅でワークショップ
- 11:45 昼食
- 12:45 二本松駅へ移動・解散



1日目【11月17日】

実施概要

●車内にて

全体会終了後に、各分科会への移動のため大型バスに乗り、車中で昼食を摂っていただきました。到着までは時間を要することから、この時間帯を利用して、二本松市の概況や受入団体である、NPO法人ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会の活動などについて、添乗した担当より紹介しました。到着後、道の駅ふくしま東和で自己紹介やオリエンテーションを行いました。



●桑加工所、堆肥センター見学

ゆうきの里東和では地域資源である桑の葉に着目し、地元の農家が生産した桑の葉を買い取って、荒茶加工からパウダー加工品を行い六次産業化に取り組んでいます。堆肥センターで作られた堆肥は、東和げんき野菜を作る際に施肥されています。



●ワイナリー見学、新規就農者説明

震災後農家のおやじたちが夢を追いかけて作り上げたワイナリー「株式会社ふくしま農家の夢ワイン」の説明を受けられました。また、新規就農者3名の取り組みの話を聞き、質問に答えるなど交流の場となりました。



●交流会と夜なべ談義

戊辰戦争没150年という記念すべき年でもあり、二本松少年隊の演舞で歴史を偲ぶとともに、960年の伝統を誇る「木幡の幡祭り」の大幡を掲出し交流会を盛り上げました。郷土料理の「ざくざく汁」と地酒と言うべきシードルやワインで楽しく賑やかな宴の時間を過ごしました。夜なべ談義では各農家民宿に分かれ、お酒を飲みながら夜遅くまで交流を深めました。



2日目【11月18日】

実施概要

●リンゴ収穫体験

標高約460mに位置する羽山高原は寒暖差があるため、実の引きしまった蜜の濃い美味しいリンゴが採れます。羽山リンゴ団地でリンゴ収穫を楽しみました。天候にも恵まれ思い出に残るリンゴ収穫体験となりました。



●ワークショップ

ワークショップは若い実行委員が中心となり、運営を行いました。ワークショップの目的は、2日間の学びを整理することと、東和地域をよくするための提案をしてもらうために開催しました。「地域づくりとは何か」をテーマに4つの班に分かれて、話し合いを行いました。その中で、「地域づくりは人づくり」、「みんなが楽しくやるのが大事!」、などの発表がありました。ワークショップの最後には、参加した皆様に一言で「地域に帰った後に〇〇をする!」とプチ宣言をしていただきました。「農家民宿を開業する」「空き家をなくす取り組みをする」など、積極的な宣言をしていました。



●昼食会

東和の農産物を使用して、地域おこし協力隊が考案した、ハンバーグ定食を囲みながら、二日間を振り返り別れを惜しまました。お互いの今後の活躍を約束して、帰途につきました。



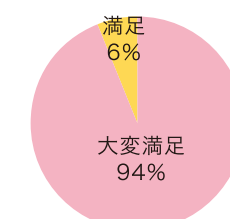
分科会全体をととして

分科会を振り返って

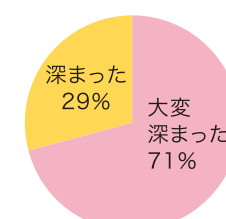
2日目の開催となった分科会ということもあり、参加者の緊張感も和らぎ、和気藹々にかつ積極的な交流が図られました。自分たちの地域には多様な資源があるにもかかわらず、他地域のことに目移りし、魅力ある資源を見逃していることが意外に多いと思います。これが地域の宝である資源だと気づくことが大切であり、それを誰がどのようにアピールしていくか、形にしていけるかをテーマとして第2分科会を開催しました。二本松市東和地域にある資源を見つけ、これらを活かして自主的な取組を展開している事例について現地を見てもらい、これらの評価を地域に持ち帰り、具体的な取組に移行できるかなどを考えて頂くことができました。参加者は思い思いに自発的、意欲的な考えを述べられており、地域づくりの原点を学ぶことができ、得るべき成果があった分科会になりました。



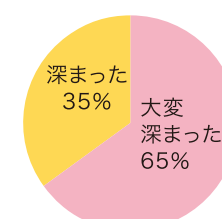
参加者アンケート 紹介



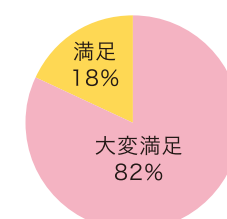
分科会に参加しての
全体的な感想



地域との交流は
深まったか



参加者との交流は
深まったか



食事は美味しかったか

意見・感想・提案

- 東和の皆様のあたたかいおもてなしに感動しました。
- とてもいい学びの機会になりました。
- 地域にある資源をうまく活用していると思いました。
- 農家民宿はほかの分科会になく、とてもよかったと思います。
- ワークショップを地域の若い人に任せていることに驚いた。
- 東和のような取り組みをしたい



開催趣旨

福島県の中央部に位置する郡山の発展(地域づくり)は、1879(明治12)年から始まった安積疏水開削に遡ります。過去・現在、そして震災の記憶を巡りながら復興に向け挑戦していく開拓者の地で、人づくり、地域づくり、未来づくりについて大いに語り合うことを目的として開催しました。



プログラム

1日目【11月17日】

- 12:20 Jヴィレッジ出発
- 12:30 広野ICから小野IC
(歓迎挨拶、参加者自己紹介、行程等の説明)
- 13:25 小野ICから猪苗代磐梯高原IC
(安積開拓と安積疏水に関するDVD鑑賞)
- 14:40 上戸頭首口見学
- 15:30 沼上発電所見学
- 16:00 丸守発電所見学、疏水神社参拝など
- 18:15 郡山ビューホテルアネックス到着、チェックイン
- 18:50 第3分科会交流会
- 21:00 夜なべ談義

2日目【11月18日】

- 8:30 郡山ビューホテルアネックス出発
- 9:00 安積歴史博物館見学、開成社のみなさんと懇談
- 10:10 開成館見学
- 11:00 ふくしま逢瀬ワイナリー見学
- 11:50 麓山の飛瀑見学
- 12:25 郡山駅着、解散式



1日目【11月17日】

実施概要

①上戸頭首工(安積疏水の取水口)

安積疏水改良区の担当者から、安積疏水開削の歴史、安積疏水の目的などをお聞きました。「取水口が扇の形になっているのは、猪苗代湖の表面の暖かい水を、農業用水のために取り入れるためです」と説明を受けました。(安積疏水の詳細は、ホームページをご覧ください。<http://www.asakasosui.jp/>)



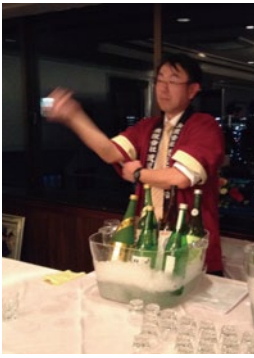
②沼上発電所

安積疏水は、農業用水としてだけでなく、その高低差を利用して幾つかの水力発電所で電気をつくりました。その電気を求め、製糸工場や化学工場が進出し、現在の産業の礎になっていることを学びました。



③第3分科会交流会

主催者挨拶(ウェルカムスピーチ)で郡山市ブロック会議代表の宮川雄次さんは、「開拓者のまち、郡山ようこそ」と歓迎の言葉を述べました。その後、郡山の食材をたっぷり使った料理に舌鼓を打ちながら、交流を深めました。交流会では、前年度開催県の香川県からご参加の方、次年度開催県の兵庫県からご参加の方たちからも、一言挨拶をいただきました。交流会に引き続き、夜なべ談義を開催しました。



2日目【11月18日】

実施概要

福島県立安積高等学校の敷地内にある歴史的建造物を利用した博物館安積歴史発物館では、郡山発展の足跡をたどりました。安積開拓(郡山の発展)は1873(明治6)年に、福島典事中條政恒が、安部茂兵衛ら25人の商人たちで開成社をつくり、原野に鋤を入れたのが、安積開拓の始まりです。



●開成館

25人の商人で結成した開成社は、現在も子孫の25人の人たちで活動をしています。開成社ですので、代表は、「社長」です。そんな開成社の設立当初の様子を、開成館の展示物など学びました。



●達瀬ワイナリー

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故により打撃を受けた農業と農家を支援することを目的としていることを学びました。



●麓山の飛瀑

麓山の飛瀑は1882(明治15)年に、開成社などの有志が安積疏水の通水を記念して麓山公園の一角に築いた滝です。安積疏水事業の記念碑的建造物で、当時の安積疏水の最終地点の一つです。この地で、私たち第3分科会の二日にわたる地域づくりの学習と交流は終わることになりました。



分科会全体をととして

分科会を振り返って

【分科会を準備する中で】

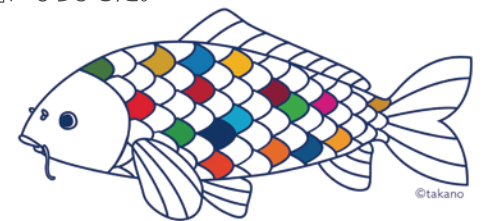
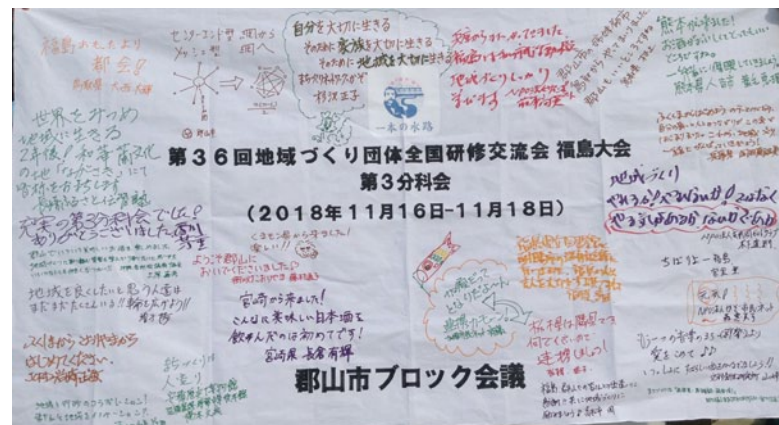
第3分科会の実行委員会として、郡山市ブロック会議を設立しました。郡山の根っこ部分(開拓者精神。地域づくりを自分事とする精神。)を伝えようということになりました。そして、安積疏水を通して、郡山の過去・現在・未来を伝えることにしました。まず、自分たちが勉強するところから始めました。

【分科会を開催してみて】

日本遺産に認定されている安積疏水のテーマは、「未来を拓(ひら)いた『一本の水路』」です。第3分科会には、全国から26名のみなさんにご参加いただきました。安積疏水の開削には、郡山地元の人のほか、全国の9藩(久留米藩、鳥取藩、岡山藩、松山藩、土佐藩、米沢藩、会津藩、二本松藩、棚倉藩)の人たちが力を合わせました。

分科会を開催し、地域づくりには他人事(ひとごと)ではなく自分事(じぶんごと)に思う仲間を集い、力を合わせることの大切さを、分科会参加者のみなさんと共有できました。

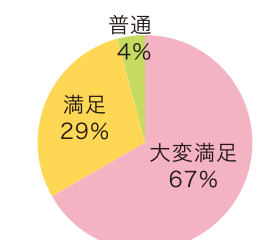
「未来を拓(ひら)いた『一本の水路』」は今、「未来を拓(ひら)く『一本の水路』」になりました。



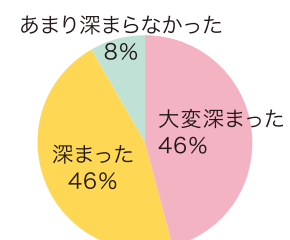
(協力団体)

開成社／安積歴史博物館／安積疏水土地改良区／月刊誌「街の灯こおりやま」／郡山ブランド野菜協議会／郡山ブランドデザインProject 会議／一般財団法人郡山市観光協会／MCネット／NPO 法人まごっせKORIYAMA／(宿泊施設)郡山ビューホテルアネックス／(事務局)郡山市ブロック会議／郡山市政策開発部政策開発課／福島県県中地方振興局／NPO法人うつくしまNPO ネットワーク

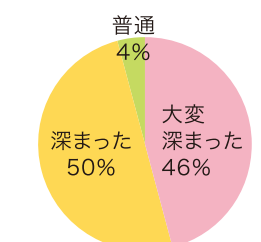
参加者アンケート紹介



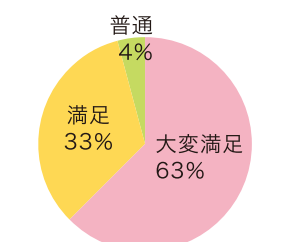
分科会に参加しての
全体的な感想



地域との交流は
深まったか



参加者との交流は
深まったか



食事は美味しかったか

意見・感想・提案

- 郡山の歴史を知ること、地域の暮らしが見え、我が地域として何がちがいが何が資源かを考えさせられた。米の活用、酒はとても多いが飲む人も多いのだろう。消費がないと生産もできないのかも。養蚕→鯉、水→産業 勉強になりました。

【反省点】

バスでの移動時間が長く、ゆっくりと意見交換やひざ詰めで交流を深め意見交換が出来なかった。

【びっくりしたこと】

夜なべ談義の時に、熊本県からご参加のひと、安場保和のことで盛り上がり、地域と地域、人と人が繋がっていることに驚きました。

第4分科会 三春町

伝統ある町からアニメ文化を発信

～新しいまちづくりのかたちと魅力～

(株)福島ガイナ



集合写真:三春滝桜の前で撮影

開催趣旨

第四分科会では、滝桜、三春駒など三春町の魅力や文化、伝統を知ってもらうとともに、若い世代に向けた情報発信と地域雇用の取組を実際に見て感じてもらう事を目的としました。

三春町では、伊達政宗の妻である「愛姫」の生誕450年を記念して、様々な事業を展開しています。若い世代に向け地域を知るきっかけづくりとして、アニメーションとコラボし、地域の魅力発信や交流人口の拡大を目指しています。地域の歴史や文化をアニメーションを通じてどう伝えていくか、自治体や地域がどのように関わっていくかを知っていただき、今後の地域づくりの参考にいただければと思います。



滝桜の風景



福島さくら遊学舎の見学



町中散策の様子

プログラム

1日目【11月17日】

- 12:30 Jヴィレッジ出発
- 14:00 福島県環境創造センター着
- 15:30 福島県環境創造センター発
- 15:45 ミュージアム「福島さくら遊学舎」着
- 17:50 ミュージアム「福島さくら遊学舎」発
- 18:00 三春の里田園生活館着
- 18:30 分科会交流会
- 20:30 夜なべ談義

2日目【11月18日】

- 7:30 朝食
- 8:20 民宿先発
- 8:35 三春滝桜着
- 8:45 三春滝桜発
- 9:00 三春町歴史民俗資料館着
- 10:00 三春町歴史民俗資料館発
- 11:00 きたまち蔵着
- 11:30 「みはる浪漫 八文字屋」お食事処ほうろく亭
- 12:30 出発
- 13:00 JR郡山駅着

1日目【11月17日】

実施概要

全体会終了後、Jヴィレッジから移動の車中では、まず2日間の予定について再度説明をしたのち、福島ガイナが三春町と共同で制作したアニメーションを鑑賞しながらの昼食になりました。

1日目は、三春町内外からも多くの人が訪れる福島県環境創造センターを見学し、福島ガイナが運営するミュージアム、福島さくら遊学舎へと向かいました。両施設とも学べる施設という点で小学校の見学ルートや一般の観光ルートとしても利用が多く、福島さくら遊学舎ではアニメーターの体験なども行っています。また福島県環境創造センターでも環境を意識した様々な体験が出来るようになっています。



コミュニティ福島での案内説明



ミュージアムの見学

●福島県環境創造センター見学

福島県環境創造センター交流棟では、東日本大震災の際の状況や、福島県内での環境の回復への取組を案内スタッフと共に見学。

普段では聞いたことのない放射線の知識には参加者もスタッフも熱心に聞き入っていました。また世界に二つしかない360°映像シアターでは「とても迫力があつた」という感想もいただきました。



福島第一原発のジオラマの説明



世界や全国の放射線測定の数値を見れるマップの説明

●空想とアートのミュージアム 福島さくら遊学舎見学

福島県内の自治体との共同で制作したアニメーションの展示や、県内のアニメを集めた今年開催されたイベント、マジカル福島をテーマにした企画展、アニメの制作過程を解説した常設展などを見学。1時間ほど館内を見て回った後に、アニメーターの体験として、トレース(写し絵)体験を行いました。短い時間の中でしたが、皆様、真剣な表情でトレースを行っていました。見学と体験を通じてアニメの制作の裏側を体感できたのではないかと思います。



アニメーション制作のコーナーを見学



アニメーターのトレース体験

●宿泊先 三春の里田園生活館

地元の方も多く利用する宿泊施設で、交流会では地元の食材を使ったメニューとお酒が振舞われ、大盛り上がりとなりました。

三春町町長の歓迎の挨拶から始まり、三春町の文化や歴史などについての話に続いて、参加者の皆様にも地域で取り組んでいる活動の紹介をしていただきました。夜なべ談義も含めて時間は短い中ではありましたが、交流会を通じて、参加者間の相互理解の広がりを感じられました。



分科会交流会(参加者の皆さまの取組紹介)

2日目【11月18日】

実施概要

2日目は三春町の歴史や伝統、地域づくりの取組を知ってもらおうと町内を中心に散策する内容になります。天気にも恵まれ、滝桜の上にも青空が広がっており、実物を見た時は皆様声を上げて喜んでいただきました。出発後は、三春町の歴史を学べる三春町歴史民俗資料館を見学、外に出て、徒歩にて三春町の町中散策。三春町歴史民俗資料館館長の山口さんの案内のもと、三春町の成り立ちから文化の成り立ち等様々な内容の話を、皆様とても感心した様子でした。



滝桜へと続く道を歩く



滝桜を見学

●三春町歴史民俗資料館 見学

三春町の民族と歴史についての展示のほか、三春出身の登山家、田部井淳子さんの展示などを見学。三春の成り立ちや伝統工芸など、参加者の皆様だけでなく、スタッフ一同も感心しながら館内を回りました。



歴史民俗資料館館長の山口さんから説明を受ける



三春の伝統文化、三春駒と張子人形の展示

●三春町内の散策①

歴史民俗資料館～三春郷土人形館～なかまち蔵

徒歩で町内の中心地へ移動し、三春町の伝統建築物である蔵を活用したカフェや観光案内所を見学。道中では城下町の名残が残る道や、城跡の門、三春郷土人形など三春町の歴史に触れながら、中心地の整備の取り組みについても説明を行い、地域の特性などを知っていただけるいい機会になったと感じました。



三春郷土人形館



三春なかまち蔵 観光案内・花かご

●三春町内の散策②

三春ふれあいの蔵～きたまち蔵～昼食

三春きたまち蔵は、町と連携した観光情報の発信と町中の拠点として、去年オープンした新しい建物となっています。観光案内所の他、福島ガイナの制作事務所としても活用を行っており、町の取組として、「アートクリエイター教室」という町内の小中学生を対象としたイラスト教室なども行っています。今回はその「アートクリエイター教室」の様子も見学。

アニメやイラストを通じて、地域の子どもが関わっている場を実際に見てもらうことで、コンテンツと自治体や地域との関わり方を、参加者の皆様に感じていただけたのではないかと思います。



きたまち蔵「アートクリエイター教室」の見学

分科会全体をととして

分科会を振り返って

今回の分科会では全国各地から11名のご参加があり、皆様が三春町の魅力や取組に興味を持っていただくというのがまず目的にありました。その中で、アニメーションと地域との関わり方というテーマの元、実際に自治体や団体と取り組んだ事例を見ていただくことによって、地域づくりのヒントを掴んでいただくことが出来ればと考えていました。ただし、時間の余裕がなく、各スポットでも駆け足だった部分もあり、周辺の景色や店舗などゆっくりと巡ることができなかったのは反省点であると感じました。ミュージアムではアニメーターの体験を真剣な表情で取り組んでいただけたこと、2日目の滝桜見学の際、皆様が笑顔を見せてくださったことがとても印象に残っています。今回の分科会が少しでも今後の活動に際して参考となれば幸いですし、私どもも皆様から学ばせていただきました多くのことを今後の活動にいかしていきたいと思います。心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

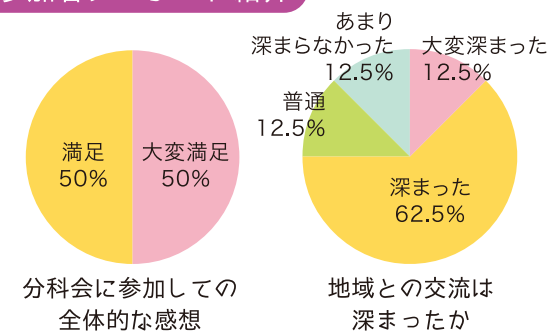


空想とアートのミュージアム 福島さくら遊学舎
アニメーター体験から



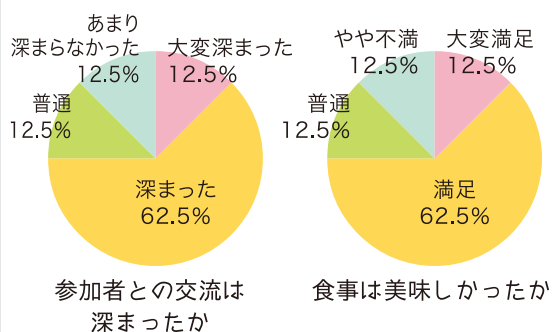
城下町三春を歩く

参加者アンケート紹介



分科会に参加しての
全体的な感想

地域との交流は
深まったか



参加者との交流は
深まったか

食事は美味しかったか

意見・感想・提案

- 「福島さくら遊学舎」ではあまり知ることでできないアニメ制作の現場雰囲気や工程、トレース体験のワークショップなど普段味わえない体験ができ大変有意義でした。また、三春町の散策では参加者同士で説明いただいたお城の場所を確認しあうなど交流しながら勉強もできたのが良かったです。
- 主催者と参加者との距離が近く、アットホームな感じで2日間を過ごせた。
- 普段覗くことができない『アニメ』制作の裏側や全国の至る所でアニメを活用した地域活性化の動きがある事を知ることが出来て、勉強になった。
- 環境創造センターでは放射線に関する知識や福島の実状を広く知ることができました。また、三春町内ではさくら遊学舎でのワークショップ体験、町内を散策しながらのまちづくりの取組などに理解を深めることが出来、大変充実したプログラムでした。

第5分科会 鮫川村

農山村の可能性を探る

わくわく元気発信ライフシェアリング！

～元気な農業グループの底力、多彩な体験交流が生まれる現場を見る～

(特非)あぶくまエヌエスネット



開催趣旨

あぶくま南部高原は、人と自然が共生してきた農村地帯です。地方の共通課題～人口減少、高齢化、継承者、荒廃農地など山積する課題を笑顔で乗りきろう～と何があっても諦めない元気にユニークな体験交流活動を実践している農家、グループ、NPOを訪ね交流をしました。多様な体験交流が生まれる現場から過疎地の今後の可能性を皆さんと探り語ることが出来ました。

第5分科会 地域協力者(敬称略)

ゲスト/吉元 章雄	都市交流、首都圏協力
ゲスト/岩切 準	NPO法人 夢職人 代表理事 (首都圏)
蛭田 一	こいこい倶楽部
齋須 寛一	鮫川和紙の家
齋須 信子	鮫川和紙の家
小澤 昌男	おざわふぁーむ
小澤 啓子	おざわふぁーむ
鈴木 翔瑛	地域おこし協力隊「古殿町」
清水 大翼	ファームつばさ
清水 奈々	ファームつばさ
橋爪 弘子	ギャルケロサミット代表、 NPO法人あぶくまエヌエスネット副理事長
蛭田 和代	ひるてい地域もりあげ隊
伊藤 千陽	石川町移住田舎暮らし実践中
伊勢野大吾	石川町移住田舎暮らし実践中
我妻 正紀	鮫川村役場総務課
進士 徹	NPO法人 あぶくまエヌエスネット理事長
進士 由美子	体験民宿WARERA元気倶楽部



マイクロ バス移動中～自己紹介タイム、参加動機など伺いました。



古殿町～「おざわふぁーむ、みんなの家でのティータイム「ミルク鍋、凍み餅、揚げまんまなど」。美味しいと全員から大好評でした。



あぶくまエヌエスネットで、石窯ピザのトッピング。地産地消の特製ピザ！

プログラム

1日目【11月17日】

- 12:30 Jヴィレッジ出発～いわき榎葉IC(磐越道)～いわき湯本IC経由
- 14:10 おざわファーム着、ティータイム「みんなの家見学・概要説明」・地域おこし協力隊、鈴木翔瑛さん「日頃の取組説明」
- 15:30 鮫川和紙の家視察～17:00鮫川村直売所「手まめ館」視察
- 18:00 ほっとはうす・さめがわ着～18:30分科会交流会～20:30夜なべ談義

2日目【11月18日】

- 8:00 ほっとはうす・さめがわ発～8:30いわき市貝泊地区「コイコイ倶楽部」視察
- 10:20 あぶくまエヌエスネット着～フィールドワーク・鮫川村&県南地域活性化報告～石窯ピザトッピング体験～昼食石窯ピザ
- 12:45 鹿角平高原経由～14:15 JR勿来駅 解散

1日目【11月17日】

実施概要

①分科会初日は、古殿町で専業農家を営む小澤さん夫妻「おざわふぁーむ」を最初に訪ねました。ユニークに地域密着型先導的に活動を実践しています。活動の秘訣や郷土のおやつ「揚げまんま」は参加者の皆さんから大好評でした。古殿町地域おこし協力隊の鈴木翔瑛さんからも日頃の取組について説明を受けました。

②齋須寛一さんの鮫川和紙工房。役場退職後に、地域伝統の和紙作りを継ぎ現在に至ります。和紙が出来るまでの行程をわかりやすく伝えてくれました。



小澤啓子さんから「おざわふぁーむ」の説明



古殿町地域おこし協力隊「鈴木翔瑛さん」の日頃の取組の説明



鮫川和紙の家視察。齋須寛一さんから和紙の出来るまでについて説明。



鮫川村手まめ館視察。館長、岡部良典さんから運営について説明。

分科会交流会～会場は、ほっとはうすさめがわのほっとルーム。ここから合流した地元参加のファームつばさの若いカップル。こいこい倶楽部代表の蛭田一さん、東京からゲストに吉元章雄さん(都市交流事業)。「キッズ宿泊体験連携」NPO法人夢職人の岩切準代表。さらに交流会は盛り上がりました。



分科会交流会ですっかり打ち解けて、2回目の集合写真です。



「ファームつばさ」酪農にかける人生30代の二人の覚悟は本物です。



東京からのゲストNPO法人夢職人代表岩切準さん。首都圏の子どもの田舎体験を具現化しました。



全て手作りの料理。地元の蛭田和代さんが準備と調理をしてくれました。



手作りの発酵料理



分科会の感想～兵庫県淡路島から参加された木村幸一さんから、「第5分科会はとにかくおもてなしがすごい最高」とメッセージをいただきました。

夜なべ談義も盛り上がりました。会場は「ほっとはうす体験館」ここでも郷土料理と発酵料理と地元のお酒で更に交流が深まりました。

2日目【11月18日】

実施概要

2日目は、いわき市貝泊地区で長年交流事業を実践している「こいこい倶楽部」を訪ねました。週末限定の直売所「やまぼうし」は、高齢者を軸に野菜を店先に出すなど交流の場になっています。いわき市内の大学や首都圏女子大学と交流事業を展開しています。



こいこい倶楽部～視察の様子、会長の蛭田一氏の挨拶



副会長の芳賀さんよりこいこい倶楽部の事業説明を受けました。

この地で30年の活動蓄積のあるNPO法人あぶくまエヌエスネットがラストの視察場所と石窯ピザの体験を共有しました。農村と都市交流の実践や首都圏の子どもたちの宿泊型農的・自然学校「ぼんた山元気楽校」の取り組むフィールド研修でした



あぶくまエヌエスネット、フィールドワーク。
ガイドは、夢職人の岩切代表。



鮫川村役場総務課、我妻正紀氏、
村の活性化対策や課題について説明。



福島県県南地方振興局、木戸善幸さん
から地域活性化取組の説明。



焼きたての石窯ピザ



石窯ピザ～アツアツをいただきます～。

分科会全体をととして

分科会を振り返って

第5分科会は11人と少人数の参加でしたが、良かった点として、より深まった研修と交流する事が出来ました。全体会場からの移動は、マイクロバスでした。その為に車内のスペースもほどよく参加の皆さんと親近感を始めから感じられ、常に会話が絶えない温かい空気感があり、時間の経過と共に徐々にその雰囲気も高まっていった分科会でした。

視察研修先は、「おざわふぁーむ・鮫川和紙の家・鮫川村直売所「手まめ館」・ファームつばさ・こいこい倶楽部・NPO法人あぶくまエヌエスネット」でした。農山村共通の課題は山積状態。どこも前向きに希望を抱き、つながりを大切にしながら元気に取り組んでいます。全国各地で地域づくりに取り組んでいる皆さんに活動現場を見て頂き、心からの交流が出来た事は非常に意義深いものを感じました。アンケートの自由記載にも皆さん印象的なメッセージの記載ばかりでした。この出会いとつながりを今後も大切に育てていきたいです。

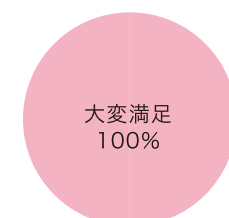


あぶくまエヌエスネット名物、石窯ピザ体験！

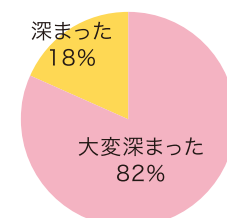


全ての研修が終了して帰路のバスに乗り込む前のお別れのハイタッチ

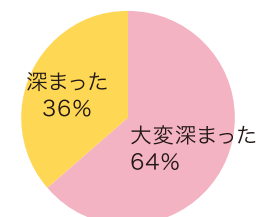
参加者アンケート紹介



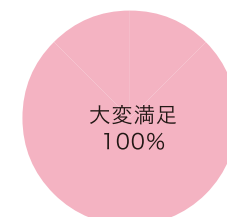
分科会に参加しての
全体的な感想



地域との交流は
深まったが



参加者との交流は
深まったが



食事は美味しかったが

意見・感想・提案

- 皆さんの活躍感動しました。子どもの笑顔が見える場所、人が集う場所の大切さを実感しました。
- 地元の方の生の声が聴けて良かった。多くのヒントを頂きました。
- グリーンツーリズム福島発祥の地へ参加し本当に良かった!! 今後の活動に役立てて行きたいと思います。
- 自身の視点とは別の視点で考え感じる事が出来大変今後の活動の参考になりました。
- 大変有意義な研修交流会でした。地域の素晴らしい生き方をされている人々との交流も感動的でした。
- 地域の特性(ある意味、特に観光となる素材が少ないなど)を活用(逆利用)した取組に感銘を受けました。
- 全体を通して、丁寧なおもてなしの気持ちがあふれていてとても居心地が良かったです。
- 訪問先の方が皆さんありのままで自然な感じで話して頂けて親近感がありました。
- 地域が抱える課題や解決に向けた取組を全国の方と語り合えた事は大変有意義。

第6分科会 三島町

奥会津の「山力＝やまぢから」を発揮して 未来への橋渡し

～縄文に学ぶ、持続可能なライフスタイルの創造～

(一社)IORI倶楽部



開催趣旨

開催地の三島町は只見川上流の山間の町で「日本で最も美しい村」連合にも加盟しています。日本有数の豪雪地ですが、縄文時代から人々が暮らし、生活の知恵や技(わざ)を連綿と受け継いできました。

第6分科会では、草木を活かした建物づくりやモノづくり、狩猟や山守、食の生産や保存等々に日々取り組んでいる人々を紹介し、参加者の皆さんと共に、縄文的精神に学んだ持続可能なライフスタイルについて想いを巡らせました。



只見川第1鉄橋を望む



神々の道筋の山城公園展望台で語る星賢孝さん

プログラム

1日目【11月17日】

- 12:10 Jヴィレッジ出発
- 12:30 三島町と縁のある四倉の食堂
「くさの根」にて昼食
- 13:30 バスで三島町に移動
- 16:30 早戸温泉つるの湯に到着
- 18:00 つるのIORIカフェにて分科会交流会
テーマは「狩猟・採集」
- 21:00 カフェにて引き続き、夜なべ談議
- 24:00 湯治棟にて就寝

2日目【11月18日】

- 6:00 有志で只見川沿いの遊歩道を散策
- 7:00 つるの湯湯治棟にて朝食
- 8:00 早戸地区の「神々の道筋」を地元ガイドと歩き本村へ
再生古民家やゲストハウスを見学
- 9:15 早戸本村にて若きキコリによる栗の樹の伐倒を見学
昔のノコギリやオノを使ってマキ割体験
- 10:30 生活工芸館にて国指定伝統工芸の編み組細工を体験
- 11:50 ゲストハウス「ソコカシ」にて縄文ランチワークアップ
- 14:00 道の駅「尾瀬街道みしま宿」にて終了式



生活工芸館にて編み組細工体験

1日目【11月17日】

実施概要

まずは三島町とご縁のある、いわき市四倉の「食堂くさの根」にて腹ごしらえ、福島県の東から西へ、約190kmのバスの長旅から始まりました。浜通り～中通り～会津と移り変わる車窓からの風景を解説しながら、東日本大震災以降の各エリアの特徴や、IORI倶楽部の取組を紹介しました。また、奥会津の伝統行事や、マタギによる狩猟のビデオを、リアルな体験談を交えながら見て頂きました。

早戸温泉つるの湯に到着後、早速温泉で長旅の疲れを癒し、その後、つるのIORIカフェにて、地元の方々も参加しての交流会となりました。



食堂くさの根にて腹ごしらえ

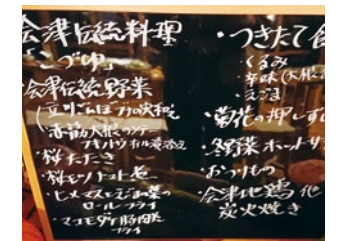


交流会開催前のワンショット、郷土写真家の星賢孝氏による撮影

分科会に登場する方々の取組などが紹介されている、冊子やパンフレットを資料として用意、後々の記録として残して頂けるよう、クオリティも追求しました。編み組細工で使用するヒロロのひもで包み、プレゼントに仕立てました。移動中のバスの中では、其々の資料についての説明を行い、交流会や2日目に予定されている様々な体験についての予習の場となりました。



参加者にプレゼントした資料



地元の食材をふんだんに使った様々な創作料理が並びました

交流会のテーマは「狩猟・採集」、地元で活躍している「つるのIORIカフェ」の小松今日子さん、「キッチンMORy」の森田喜美代さんのお二人に、難しいテーマでしたが、交流会の料理を創作していただきました。会津地鶏を始め、マタギの猪俣氏が山から採取してきたブナの実、地元沼沢湖のヒメマス、耕作放棄された田んぼで育てているマコモダケなど、地域から得られる素材をふんだんにいかし、見た目も美しく、勿論おいしい料理が会場に花を添えてくれました。



交流会開始前のひと時、インスタ映える料理を前に、しばしの撮影タイム



和気あいあいとした雰囲気の中で語る人々に耳を傾けました

第6分科会への参加者は17名、地元からの参加者を交え、総勢30名での交流会となりました。会場となったカフェは、IORI倶楽部が取り組んでいる、地域材を活かした住まいと暮らしを提案したコンセプトハウスであり、現在は、移住者でもある小松さんが、カフェを切り盛りしながら交流拠点としての運営を担っています。この拠点をいかして地域で活躍している方々との交流の場となりました。彼女たちに創作していただいた料理が素晴らしく、参加者の方々の舌も滑らかになっていました。



トチの木の皿にダイナミックに盛り付けられた料理

2日目【11月18日】

実施概要

宿泊したのは、つるの湯の湯治棟。自炊の宿なので、朝食は前夜に引き続き森田さんと小松さんのお世話になり、手作り朝食。早起きした有志は、地元の佐久間建設工業が東北芸術工科大学と7年に渡って造り上げてきた、只見川沿いの遊歩道を散策しました。朝から素晴らしい快晴に恵まれた中、マタギの猪俣昭夫さん、郷土写真家の星賢孝さん、早戸行政区役員の橋本光五郎さんのガイドで、本村までの「神々の道筋」をトレッキング。地元の方々が手入れをしながら、今も守り続けている昔ながらの生活の道です。本村集落では住民の方々が、ふだんの暮らしについて説明してくれるなど、交流の場面も生まれていました。



マタギの猪俣さんのガイドで神々の道筋をトレッキング



集落の方が早戸本村の暮らしのことを語ってくれました

早戸本村の奥まで歩みを進め、手入れが行き届かなくなったために枯れかかっている栗の樹を、地元佐久間建設工業森林事業部所属の若きフォレスターたちの手によって伐倒される様子を見学したのち、昔のノコギリやオノを使用しての薪割り体験を行いました。



オノで薪がスバッと割れると大喜び



昔のノコギリはなかなか切れなくて一苦労

町が運営している生活工芸館で、国の伝統工芸に指定されている編み組細工を体験して頂きました。矢澤源成町長からは、ふるさと町民制度や生活工芸運動など、三島町が行ってきた地域づくりの足跡についての紹介があり、工芸館長からの編み組細工の説明、指導員の紹介に続いて、ヒロコ細工によるコースターづくりが始まりました。皆さん、悪戦苦闘しながらも、指導員の方々から直接手ほどきを受けて、無事に作り上げることができ、ほっとした表情を浮かべていました。



地域づくりの足跡を語る矢澤町長



ヒロコ細工の縄ないは高難度の体験

分科会のトリを飾る拠点「ソコカシコ」は、移住者でもある三澤真也さんが、空き家となっていた古民家を、アーティストたちと共にリノベーションを行って創り上げたゲストハウスです。縄文時代晩期の荒屋敷遺跡の上に建っています。参加者の皆さんには「縄文ランチ」というテーマで、食のワークショップに取り組んでいただきました。食材や味付け、調理方法などは、縄文時代について考察したうえで提供されました。黒曜石を割ってナイフを作り肉を切る。手づかみで食事をするなど、非日常の体験に、喧々諤々していただきました。



ゲストハウス「ソコカシコ」のスタッフと

分科会全体をととして

分科会を振り返って

三島町の地域づくりについては、ふるさと町民制度や生活工芸運動など、高い評価を得て来た活動の歴史がありますが、新たに「縄文」という切り口を試みた今回の分科会でした。「参加者の皆さんと共に、縄文的精神に学んだ持続可能なライフスタイルについて語り合う」というテーマ設定をして、紹介する団体や個人、体験の内容などの準備を重ねましたが、縄文的な地域の精神を見直す作業は、意外にチャレンジングで面白く、参加者の方々の声を聴くのが楽しみでもありました。

それぞれの体験メニューが、ツアープログラムとして有料化を図った場合に、参加者の満足が得られるであろうか?という裏テーマもありました。各地の地域活動を担っている方々が、全国から集まってくる今回の様な機会は、滅多に無いチャンスでした。結果としては、総じて満足度の高い評価が得られたように思います。また、各場面ごとに具体的な感想や指摘、アドバイスなどを頂くことができ、非常に有意義な時間を共有させていただくことができました。

何よりも、関わったスタッフの中から、またやってみたいという感想が得られたのが大きな収穫でした。

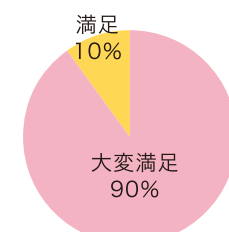


交流会で熱く語る皆さん

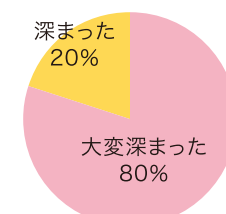


「縄文ランチ」は石を割ったり、手づかみで食べたり

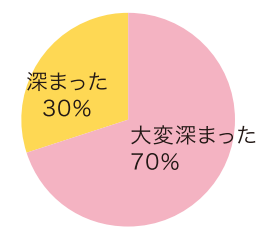
参加者アンケート紹介



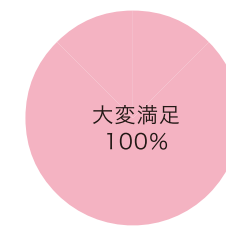
分科会に参加しての
全体的な感想



地域との交流は
深まったか



参加者との交流は
深まったか



食事は美味しかったか

意見・感想・提案

- 「地域づくり」という言葉が誕生する以前から、草の根的な活動を展開してこられただけに、三島地域の底力を拝見させて頂きました。特に、①リーダーの方々の活躍が素晴らしく、地元根付いていること、②リーダーの活躍の舞台提供をする仕組みを地元企業が提供されていること、③地域外からの人材の受け入れが物心両面で充実し、温かみがあることなど、真の地域再生・活性化に必要な要素がすべて揃っていたことに驚かされました。
- 交流会および夜なべ談義に参加して、熱い皆さんの気持ちを吸収することが出来ました。
- 心のこもった料理を堪能し、最後まで、まさに思い出深い夜なべ談義の貴重な収穫でした。
- 早戸本村までの「神々の道筋」を辿り、山、山林、石工、縄文文化を大切に守りながら、再生古民家、ゲストハウスなど、人が移り住みたくなる土地の温かさを感じました。

第7分科会 昭和村

からむし織とカスミソウの里「昭和村」

～昭和へ帰ろう～

昭和分科会



集合写真：喰丸小前で撮影

開催趣旨

昭和村は、福島県の会津地方に位置し、四季折々に美しく変化する豊かな自然と日本の原風景が残るむらです。本村では古くから途絶えることなく綿々と受け継がれてきた「からむし」を地域おこしに平成6年から「からむし織体験生事業」を開始し、100名超の体験生を全国から迎え、約3割が現在も定住しています。また、夏秋季の生産量が日本一の「宿根カスミソウ」では、栽培農家の高齢化が進む現状を踏まえ、インターンシップ形式で研修生を受け入れて「かすみの学校」を開始し、近年1ターンでの就農者が着実に増加しています。

分科会では、本村に定住するからむし織研修生及びカスミソウ新規就農者との交流をテーマとし、参加者の皆さんと移住・定住について考えるとともに、奥会津昭和村の魅力を全国に発信していきます。

プログラム

1日目【11月17日】

- 12:20 Jヴィレッジ出発
- 13:00 いわき市ワンダーファームで昼食
- 18:00 分科会開所式・交流会
- 20:30 夜なべ座談会

2日目【11月18日】

- 8:30 宿泊施設出発
- 8:40 農林水産物集出荷貯蔵施設(通称:雪室)見学
- 9:00 喰丸小見学 施設見学・カスミソウ
新規就農者との意見交換会
- 10:30 道の駅からむし織の里 しょうわ見学
体験・意見交換会
- 13:00 道の駅からむし織の里 しょうわ出発
- 14:30 JR新白河駅にて解散



農林水産物集出荷貯蔵施設(通称:雪室)の見学



喰丸小の説明



カスミソウの写真

1日目【11月17日】

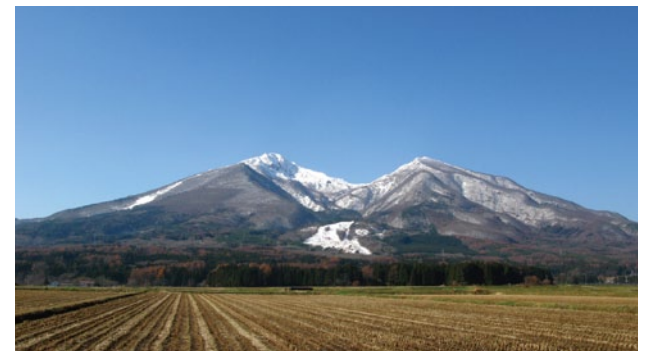
実施概要

1日目は全体会場から広い福島県を感じてもらいながら、分科会会場までバス移動となりました。車内では、参加者同士の自己紹介から始まり、役場担当者がからむし織の歴史とからむし織体験生事業の説明及びカスミソウの取組についてそれぞれ資料を交えて説明を行いました。



昼食会場：いわき市 ワンダーファーム

1日目の昼食はいわき市四倉町にあるワンダーファームでのバイキングとなりました。ワンダーファームは平成28年にオープンした施設でトマトの収穫体験や販売する直売所の他に、トマトを中心とした料理を提供するレストランも完備した施設です。参加者の皆さんは福島県のおいしい食材を満喫するとともに、さっそく参加者同士の交流が深まりました。



磐梯山

移動の途中では、磐越自動車道磐梯山SAや三島町の道の駅「尾瀬海道みしま宿」に立ち寄り、会津の観光地である磐梯山や只見線第一橋梁の見学を予定していましたが、あいにくの天候で実際に見ることはできませんでしたが、写真を通して福島自然を見学されました。



只見線第一橋梁

●しらかば荘にて交流会

分科会交流会では、地元の郷土料理と日本酒が振る舞われ、村長・副村長の他、カスミソウ新規就農者やからむし織研修生が参加し、参加者との交流が大いに深まりました。



2日目【11月18日】

実施概要

2日目は、しらかば荘を出発後、パンフレットに掲載していないシークレットイベントとして農林水産物集出荷貯蔵施設（通称：雪室）を見学しました。本施設は、雪を使って農産物を貯蔵する施設で、出荷前のカスミソウを見学したほか、前年に搬入した雪を見ることができ、参加者はこの時期珍しい雪に携わる機会となりました。



雪室の視察の様子



施設内には大型ダンブ約300台分の雪を搬入します。

●喰丸小見学 カスミソウ新規就農者との意見交換会

喰丸小は築80年の木造校舎を改修した観光・交流拠点です。参加者は喰丸小を見学した後、前日の交流会に参加したカスミソウ新規就農者3名との意見交換会を行いました。3名がどのような経緯で奥会津昭和村を選んだのか・カスミソウ農家として生活が維持できるのかなど普段移住・定住に取り組む参加者の皆さんから活発な質問がでて、にぎやかな意見交換会となりました。



改修後も当時の雰囲気を残した
つくりになっています。



意見交換会では活発な意見が飛び出し、
大いに盛り上がりました。

●からむし工芸博物館見学とからむし織研修生との意見交換会

次に会場を道の駅からむし織の里しょうわへ移して、からむし及びからむし織体験生事業の取組について説明いたしました。博物館でからむしの歴史についてレクチャーを受けたり、実際に織っている場面を見学され、初めて目にするからむし織を熱心にご覧になっていました。



意見交換会では研修生の話を熱心に聞かれていました。



からむし織に皆さん興味深々

博物館見学後は、からむし織研修生事業で本村に定住している研修生との意見交換会を行いました。前日の交流会に参加した研修生に加え、からむし織体験生事業の第一期生にもご参加いただき、からむし織体験生事業を知った経緯や奥会津昭和村に移り住んでの感想やからむし織の継承者としての思いなどを参加者と語り合い、熱の入った意見交換会となりました。

分科会全体をととして

分科会を振り返って

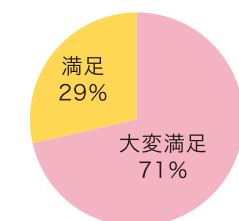
奥会津昭和村での分科会の運営は、福島大会全11分科会の中で唯一行政が主として、運営いたしました。開催に向けては、香川大会への参加から始まり、本村の特色であるからむし織とカスミソウをテーマとして、プログラム作りを進めてきました。

全体会会場から一番遠い分科会ということで参加者が集まるのか不安な面もございましたが、当日は多くの方にご参加いただき、大変有り難く感じております。参加者の皆さんとの交流は、職員だけでなく、地域の方々にも大いに刺激になったと感じております。長時間の移動が多く、大変お疲れだったかと思いますが、全国からお集まりいただいた参加者の皆さんのおかげで大変有意義な分科会となりました。心から感謝申し上げます。

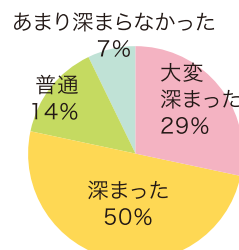


道の駅からむし織の里しょうわで記念撮影

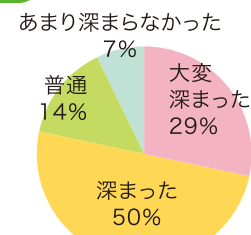
参加者アンケート紹介



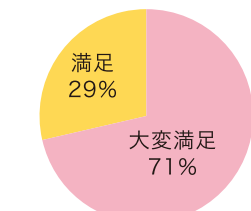
分科会に参加しての
全体的な感想



参加者との交流は
深まったか



地域との交流は
深まったか



食事は美味しかったか

意見・感想・提案

- 移動が大変だったが、温かく迎えて頂き有意義な研修となりました。
- 今回をきっかけに引き続き交流ができればと思います。
- 新しく入られた移住者の方の暮らしや織姫さんの研修後等について実際にお会いできてお話が聞けてとても勉強になりました。
- 遠かったけど参加してよかったです。
- また来たいと思える時間を過ごせました。個人的には地元の方とも話せる時間がほしいと感じました。
- 内容は良かったが、地域づくり団体同士が交流を深めるものではなかった。

第8分科会 南会津町

ワカモノ×地域資源(アロマ)でつくる集落

～未来をつくる若者たちが盛り上げる地域づくり～

(特非)南会津はりゅう里の会



開催趣旨

当地域は37年前より「二地域居住」の誘致活動に取り組んできました。その波及効果から現在では地域の中には新しいコミュニティができています。特に「ワカモノ」のターン受け入れも積極的に取り組み、新しい「職」を創造する実践の場になっています。現在は「ほしっぱの家」を拠点に地域の多様な資源を活かして「アロマ」をキーワードとした地域づくりを目指しています。分科会ではこれまで移住者の受け入れに尽力されてきた方々やIターン者、地域づくりに励む方々との交流やアロマの体験などを通して、南会津町の自然や文化に触れてもらう機会になればと思い、プログラムを企画しました。



アロマ体験後の様子



そば打ち体験後の集合写真

プログラム

1日目【11月17日】

- 12:20 Jヴィレッジ出発
- 12:40 四倉PA「よつくら亭」昼食
- 13:30 移動 車内オリエンテーション
- 15:30 南会津町散策
(南会津町庁舎・国権酒蔵・祇園祭大屋台格納庫)
- 16:30 宿泊「台鞍荘」チェックイン
- 17:00 活動紹介・意見交換会「ほしっぱの家」
- 18:40 分科会交流会「ほしっぱの家」
- 21:00 夜なべ談義「台鞍荘」

2日目【11月18日】

- 7:00 早朝散策(徒歩)
(針生区内・旧針生小学校・熊野神社 他)
- 8:00 朝食
- 9:00 アロマ蒸留見学「クロモジ」の蒸留
- 9:40 アロマ体験ワークショップ
(バスボム作り・ルームスプレー作り)
- 11:15 そば打ち体験「木地屋」
- 13:10 会津田島駅解散



自分たちの手打ち蕎麦を実食

1日目【11月17日】

実施概要

●南会津町内散策にて

道路の混雑もなく想定以上に早く南会津入りが出来たため、急遽町内散策を組み込みました。①「南会津町庁舎見学」では、地域産材を100%使い建築された庁舎を見学し、南会津の森林資源の豊富さや連携事業体の結束力に触れて頂きました。②「酒蔵見学」では全国新酒鑑評会にて11年連続金賞を受賞した国権酒造を伺いました。③「会津田島祇園祭 大屋台見学」では実際に使用される屋台(山車)を見学頂き、祇園祭の迫力と伝統を感じて頂くことが出来ました。



南会津町散策 南会津町庁舎の見学

●活動紹介・意見交換会にて

宿泊施設にチェックイン後、「ほしっぱの家」にて団体や地域の活動紹介・意見交換会を実施しました。Jヴィレッジからの参加者に加えて、東洋大学生が7名合流。区長やこれまで地域づくりに尽力されてきた方々も招き実施しました。参加者それぞれより自己紹介をして頂いた後、私達のこれまでの活動の経緯や現在の取り組みなどを「針生の物語(冊子)」を用いて一通り説明した後に意見交換を行い、活発な議論を行うことができました。



活動紹介・意見交換会にて

●交流会にて

意見交換会後、同会場にて交流会に移行しました。参加者・スタッフに加えて、福島県庁関係者、南会津町役場、南会津町議会も合流し、50人近い方々にお集まり頂きました。料理は地元婦人会に郷土料理と地元食材を使った料理を振舞っていただき、地酒4酒造の飲み比べや、南会津産のクラフトビールも提供し、大いに盛り上がりました。地元の方や学生との交流も分け隔てなく活発に行われていたことが印象的でした。



交流会にて

●夜なべ談義にて

宿泊「台鞍荘」の食堂を借りて行いました。参加者は全員参加され、また周辺に住む地域住民の方も引き続き混じり、24時過ぎまで大いに盛り上がっていました。最後まで地酒は大人気でした。



夜なべ談義にて

2日目【11月18日】

実施概要

●アロマ蒸留見学「クロモジの蒸留」について

アロマ事業において南会津ブランドとして展開している「クロモジ」の蒸留見学を行いました。クロモジの生態や環境、収穫から抽出まで一連の行程を、地元蒸留スタッフより丁寧に説明頂きました。蒸留の実践やクロモジ以外の樹種の説明を交えながら行ったことで、里山資源から展開される「アロマ」や「クロモジ」の魅力を香って頂くことが出来た。天候も良く、蒸留工房から見える景色も澄み渡っており心身ともにリフレッシュできる見学会となりました。



●そば打ち体験について

「木地屋そば道場」にてそば打ちを体験。グループに分かれそば打ちを名人指導のもと実践。分科会の最後であったため各々打ち解けあい、とても良い雰囲気で行うことができました。



●針生区早朝散策について

台鞍荘宿泊13名のうち7名が参加。徒歩またはマウンテンバイクでの散策を計画したが全員徒歩となりました。早朝の針生区各所をまわり、集落の穏やかな雰囲気を感じて頂くことができました。



●アロマ体験ワークショップについて

アロマインストラクター有資格者のスタッフがアロマオイルの成分や効能・特徴を説明しながら実施しました。「アロマ」は女性のイメージですが、生活の中でも男女関係なく使うことのできる「バスボム」や「ルームスプレー」づくりを体験頂きました。反響もよく、精油のみではなく製品化の取り組みについても学んで頂ける機会となりました。簡単でありながらもオイルのブレンドによる香りの調香、色づけなど自分好みに作ることができ、非常に楽しそうな雰囲気でした。



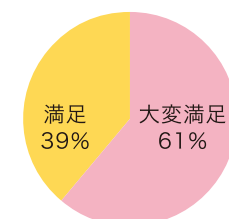
分科会全体をととして

分科会を振り返って

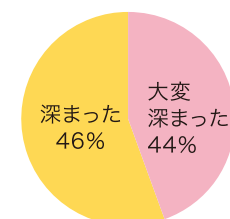
初日の意見交換会や交流会・夜なべ談義で紹介したことや議論できたことを、見学やワークショップで体験頂くことが出来たため、そば打ち体験後の昼食では多くのポジティブな意見を聞くことが出来ました。特に、地域の森林資源を活かしたアロマの取り組みは日本各地でも実践可能な事業と捉えて頂き、南会津を発信拠点として「アロマの里づくり」が波及出来ればと考えています。2日目は初日で出来なかった「体験」を重視したプログラムとしたため参加者にとっては有意義な時間を提供出来たと思います。移動が中心となる不便な分科会でしたが、それでも当地域を選択いただいた方々の意識は高く、計画した私たちも多くの学びがありました。地域の魅力を体感頂くにはほぼ1日の日程は短すぎる…と感じています。今後SNSなどを通して継続的な交流を行い、互いに刺激を持てるようにこのご縁を大切にしたいと思っています。



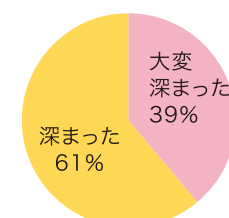
参加者アンケート紹介



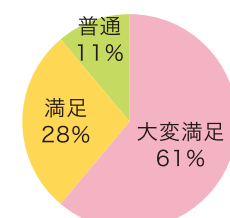
分科会に参加しての
全体的な感想



地域との交流は
深まったか



参加者との交流は
深まったか



食事は美味しかったか

意見・感想・提案

- 分科会のテーマでもあった「人との出会い」を大切に継続していきたい
- 町の大部分を占める森林をいかした取組、アロマの取組、移住関連の取組など直接自身のまちづくりにいかせないにしても、その一部をエッセンスにより地域づくりを図っていきたい。
- 将来自身の町（福島県小野町）と何かしらの連携ができればと考えています。
- 地元の方とよそ若者が上手く交わり、南会津にあるものを活用して地域づくりに取り組む様子は大変勉強になりました。
- 大木の利活用は誠に素晴らしく温もりを感じました。
- 第2の産業として「アロマ」の開発と商品化として大いに期待しております。
- 地域の皆様と腹を割ってお話できました。移動が長く不安でしたが特に問題なく参加することが出来ました。
- 事務局の対応が良かった、充実したプログラムでした。
- 東洋大学の学生参加が良かった。

福島を創る人材“あすびと福島”を生み出す最前線を訪ねる

～いまだに避難が続く地域と一方で前進を始めた福島に向き合う～

(一社)あすびと福島



開催趣旨

福島県沿岸部。大震災と原発事故により若い課題世代が地域から離れ、高齢化率が日本の20年先を直面してしまった地域で自分たちならどのように地域の課題に向き合い、可能性を探れるのか。この地域で課題解決に向け、前進を続けている講師の話聞き、地方創生のあり方を深掘りしていきます。



プログラム

1日目【11月17日】

- 12:20 Jヴィレッジ出発
- 12:40 「レストラン岬」で昼食・見学
- 14:00 避難指示区域と福島第一原発を車窓から望む
- 15:30 南相馬市小高区の街中歩きを体感
- 16:30 講演会「故郷の開墾」
- 18:30 分科会交流会
- 双葉屋旅館～南相馬市小高区～
- 20:30 夜なべ談義

2日目【11月18日】

- 9:00 双葉屋旅館出発
- 9:30 「南相馬ソーラー・アグリパーク」で再エネ体験
- 10:30 講話と対話
- 「福島復興と地方創生を担う人づくり」
- 12:00 ランチ交流会
- 13:30 JR原ノ町駅にて解散



1日目【11月17日】

実施概要

●被災地と向き合う

国道6号線を北上し、富岡町・大熊町・双葉町・浪江町の避難指示区域を視察しました。福島第一原子力発電所および避難指示が続く町並みを通過後、平成29年3月に一部の地域で避難指示が解除された浪江町へ向かいました。津波被害を受けたまま残る小学校や墓地、町中の様子を視察し、原子力災害の現実を体感しました。



浪江の旧墓地



浪江の町なかの様子



設置されたソーラーパネル



バス車窓から目にした「除染土仮置き場」

●南相馬市小高区街歩き

平成28年7月に避難指示が解除された小高駅前通りを体感。再開した商店も見ることができ、人が戻りつつある町を体感する時間でした。

●株式会社小高ワーカーズベース代表取締役 和田さんの講話

小高区において、地域の現状と復興に向けた自身の想い、仮設スーパーや女性が働く場「HARIO」などの事業拠点の立ち上げ経緯についてお話しいただきました。

●分科会交流会

小高区で、いち早く帰還し再開した双葉屋旅館の女将・小林友子さんに、震災後の行動やその想いについてお話しいただきました。自ら率先して行動しながらも、若手の挑戦を支え、創りたい未来に向けてみんなで進もうとする姿勢から、参加者たちも自分たちの地域の未来を自分たちが創っていこうと、改めて考える時間になりました。

分科会全体をととして

分科会を振り返って

○全体の感想

お互いの地域がより良くなるために何ができるのか、改めて考える貴重な機会となりました。
一個人として福島現状を体感し復興のリーダーたちと対話した第9分科会は、参加者全員が自分たちの地域にさらに何ができるか、熟考しながら意見交換を行いました。
参加者の皆さんがこのように真剣に自分たちの地域を考えることを通して、それぞれの志と熱量を高めることができました。

意見・感想・提案

- 「地域づくり団体全国研修交流会」では、本当にお世話になりました。福島現状と課題を、目で見、肌で感じた二日間でした。半谷さんの“人を育てる志”の取組みは、中山間地域の今後について暗中模索している私にとって一条の光となるものでした。また、公務員人生終盤の生き方の指針も示していただいた気がします。刺激と気づきをありがとうございました。今後の南相馬市小高区がどのように魅力的になっていくか、ワクワクしながらフォローしていきたいと思います。兵庫県の地域の元気づくりにもご期待ください。来年度、兵庫でお待ちしています。今日から感嘆符が出る日々を目指して。
- 先日、地域づくり団体研修福島大会、第9分科会にてご縁を頂きました。研修に参加させて頂き、本当にありがたく思います。目的、使命、想い、ビジネスの仕組み、社会貢献など様々な大切さを改めて考える事ができました。トマトを販路開拓したストーリーを深く知る事はできませんでしたが、素晴らしい行動の積み重ねなのだろうと思いました。自分自身も、目的やミッションを明確にし、よりスピードを増し、行動に行動を重ね目標をドンドンと達成して行き続けます。今回、お会いできたことによって、自分自身が描くビジョンの加速化、そして現実化することができるという確信につながりました。
- この度は御世話になりました。原点回帰が私のテーマでした。震災で自分自身と向き合うきっかけとなり、今回ずっと訪れたかった地に訪れることが実現できました。旨く話せませんが、理論で動くのではなく気持ちだけを純粋に南相馬市に行き、空気や情景を感じるとやはりぐっと込み上げてしまうものもありました。私なりにきりかえて今抱えている問題も、私の持っている熱量と志をどう相手に理解してもらえるか？対象者の心を動かすスイッチをおせるか？また背中を押し、相手に寄り添い支えることができるか？…今後の課題であります。双葉屋旅館の女将さんのような笑顔を忘れないことも再認識できました。ご多忙の中、これから冬本番となりますので、どうかお身体ご自愛ください。2日間本当にありがとうございました。



小高ワーカーズベース和田代表との対話



●1日目に参加者が共有できたこと

福島県沿岸部の津波被害を受けたまま残る小学校や墓地、町中を体感し、原子力災害の現実を共有しました。
南相馬市小高区では、避難指示解除後に地域のために強い想いを持って前に進む行動力に触れることで、自分たちの地域への向き合い方を深く考える場になりました。



実施概要

2日目【11月18日】

●あすびと福島半谷代表の講話と意見交換

あすびと福島が取り組む人材育成について紹介し、参加者と意見交換を行いました。
半谷の熱意や行動力に関する質問が多く挙がり、自分がやりたいと心から思えることの延長線上に社会的な価値を追求することが志であり、志を達成するために手段を常に変革し続けることが大切であるという考え方が共有されました

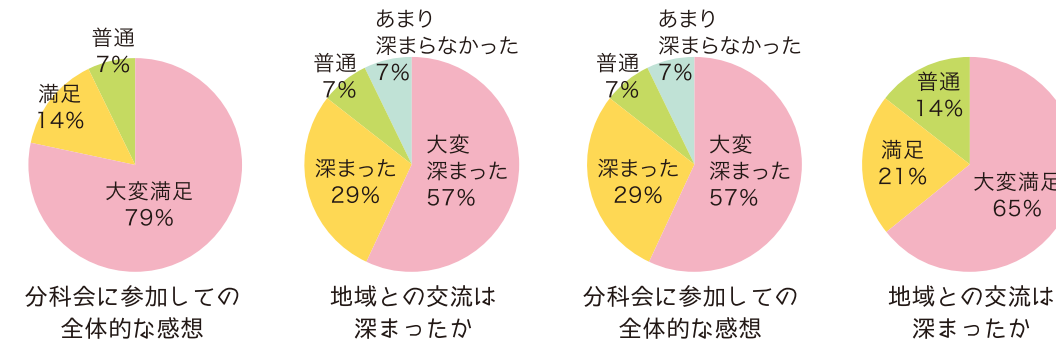


●2日目について

あすびと福島の志と小学生から大学生に渡る人材育成について触発された参加者のみなさんが、自分たちの思いと活動を深掘りする時間となりました。自分たちは自分たちの地域をどうしたいのか、ありたい地域の形にするために自分はどのような行動を起こし続けるべきか、熟考し、共有する場となりました。



参加者アンケート紹介



全町避難からの新たなまちづくり

～チャレンジする“人”に学ぶ～

(一社)ならはみらい



開催趣旨

檜葉町は原発事故から4年半の間全町避難を余儀なくされ、震災前の人の繋がり、文化、当たり前にあった暮らしが失われてしまいました。避難指示が解除され、ふるさとに戻ったひと、新たな場所で暮らすひと、震災後に檜葉に移り住んだひとなど立場や考え方の違いを超えて、直面する様々な課題に一人ひとりがチャレンジしています。立ちの壁の大きさに心が揺れ動くときもある中で、臆せず進む檜葉の「ひと」こそ、私たちのまちづくりの誇りです。全国の皆様に実際にお越しいただき、直接見て、聴いて、触れて、感じたいものを共有したい。「ひと」を通じて地域の現状に触れることで、それぞれのまちの取り組みや課題について一緒に語り合う場になればと思い、プログラムを考えました。

<協力団体>

檜葉町 一般財団法人檜葉町振興公社 木戸川漁業協同組合
木戸の交民家Co-minka/ 高原力ネ子/ゆず研究会/そよ風届け隊
/ならは天神太鼓うしお会



天神岬スポーツ公園展望台『みるーる天神』より町の南側を眺める。



津波被災地域に並ぶ除染仮置き場は搬出が進んでいる。



檜葉町で受け継がれるならは天神太鼓うしお会

プログラム

1日目【11月17日】

- 12:20 Jヴィレッジ出発
- 12:30 オリエンテーション 木戸の交民家Co-minka
- 13:45 まち・ひと巡りツアー
- 14:50 → 語り部のお話@まなび館
- 16:15 支援活動続ける学生と地域住民のお話@みらいハウス
- 17:30 天神岬到着
- 18:30 分科会交流会
- 21:00 夜なべ談義

2日目【11月18日】

- 7:30 朝食@木戸川漁港「漁協de朝メシ」
- 9:00 周辺町村の見学
- 夜ノ森の桜並木見学
- 9:30 → 津波被災バトカー
- 10:30 コンパクトタウン見学
- 11:00 振り返りワークショップ
- 12:30 昼食
- 14:00 JR木戸駅にて解散

1日目【11月17日】

実施概要

分科会1日目は、まち・ひと巡りツアーとして震災・復興状況の見学に加え、生きがいを持って楽しく暮らす達人や、支援活動を続ける若者たちを含む「ひと」に会いに行き、お話を伺うプログラムをおこないました。語り部の高原さんは、震災当時の経験語り継ぐ活動をされており、参加者の皆さんは真剣に聞き入っていました。会場は、旧檜葉南小学校。現在は“まなび館”という名前で町民のサークル活動の部室の様に生涯学習施設として使われています。



語り部：高原さん「震災前どのように生きていたかが、震災後の自分の運命を左右する」という言葉が印象的だった。



高原さんのお話に関心する参加者の皆さんの様子。

築70年の古民家をリノベーションした地域コミュニティの拠点、木戸の交民家で昼食を取りました。ここでは、オーナーの緑川さんに加え、檜葉町役場や受入団体である(一社)ならはみらいの取組、町の魅力を映像で発信するなど、様々な取組をおこなうナラノハの佐藤さんからお話を伺いました。



木戸の交民家オーナー：緑川さん「補助金に頼らない活動の大切さを学んだ」という声が多かった。



ナラノハ：佐藤さんと松本さん 町内外の力を集めて檜葉町の情報発信をする活動を紹介いただいた。

みらいハウスは、檜葉町を訪れるボランティアの皆さんが地域に根差した活動を継続的に行っていただくために整備した滞在拠点です。(委託元：檜葉町)この場所を拠点に活動を発展させている学生と、協働する町民の方にお話を伺いました。



みらいハウス外観。ボランティアさんが滞在していないときにも、地域の方が草刈りなど整備をして下さっている。



立命館大学 そよ風届け隊 代表 吉村さん 京都から月に1～2度通い、フリーペーパーの作成や町民の方と一緒に野菜を育てている。

檜葉町で一番の眺望を誇る、展望の宿天神にご宿泊頂きました。分科会交流会では、檜葉町の名産である鮭や、郷土料理マミーすいとんに加え、今年初めて作られた日本酒「檜葉の風」などを召し上がっていただき、ご満足いただけたかと思います。また、まち・ひと巡りツアーでもお会いした町民の皆さんにもご参加いただき、日ごろの取り組みやツアー内での気づきについて意見交換をおこない、交流を深めました。夜なべ談義では、会場を宿泊部屋の一室に移し、夜が更けるまで盛り上がりました。



全国からの参加者同士が交流を深めた。

実施概要

早起きして向かったのは、木戸川漁協です。本分科会の目玉企画の1つ「漁協de朝メシ!」として檜葉産の新米に、旬のいくらかけ放題の贅沢などんぶり。そして、漁協のお母さんたちにつくっていただいた鮭とたくさんの野菜を使った具沢山の紅葉汁と一緒に朝食をお楽しみいただきました。普段はなかなか見ることができない鮭の受精卵や、活きのいい鮭を目の前で見学すると同時に、津波で被災した漁協再開までの経緯と、鮭の特性等についてもご説明いただきました。



檜葉産の新米にいくらかけ放題の贅沢などんぶり。



木戸川漁協・鈴木さん 震災当時から現在に至るまでの経緯等をご説明いただきました。

檜葉町は避難指示解除から3年もの時が経ち、実際に震災の被災状況を見て感じることができる場所が少なくなりました。復興への道のりの険しさを参加者の皆さんに伝えたいと、檜葉町の北に隣接し、今でも一部帰還困難区域を残している富岡町を訪れました。



私たちが歩いているところは戻れるのに、フェンスの向こう側は戻れない。この“線”って何なんだろう。



震災当時避難誘導中に殉職した警察官2名が乗っていたパトカーを目の前にして津波の威力に言葉を失う。

みんなの交流館ならはCANvas(コンパクトタウン)

町の中心部に建設されたコンパクトタウンには、商業施設や災害公営住宅、病院やこども園に加えて交流館が建てられました。町の復興を象徴するこの施設で2日間の気づきや、それぞれの取り組みについて語り合いました。



振り返りワークショップにて。熱く語り合う参加者の皆さんの様子。



それぞれのテーブルで語られたことを全体で共有。

最後の昼食交流会では、ご参加いただいた皆様への感謝の意を込めて檜葉町で受け継がれるならは天神太鼓うしお会の皆さんの演奏をプレゼントさせていただきました。立食形式でおこなった交流会では、各々に声をかけて最後の交流を深めていました。終了間際になると檜葉町の公式キャラクターであるゆず太郎が登場し、大人気!笑顔いっぱいの交流会となりました。



参加者の皆さん・スタッフ・ゆず太郎みんなで「ハイ、ならはー!」

分科会を振り返って

参加者の皆さんにご協力いただいたアンケートには、「檜葉はもっと暗い町だと思っていた。」という意見が多数ありました。確かに檜葉町は全町避難をした過去を持ちますが、一度は離れざるを得なかったからこそ、ふるさとの魅力や尊さを強く感じている「ひと」が多いまちです。一人ひとりの、小さくても強い想いがこの町を一步、また一步と復興への歩みを押し進めている状況を、少しでも多くの人に伝えられたらと思い、今回のプログラムをつくりました。参加後の檜葉町のイメージを「明るく、たくましく前進する町」と語ってくださる方がいて大変嬉しく思っています。今回、受け入れをさせていただいて私たちも改めて気づかされたことがありました。それは、「まちづくりの根っこにある“ひと”は他のどこにもないこの町の魅力。そしてその魅力をさらに育てていくのは“ひと”と“ひと”の出会いである」ということです。今後も“ひと”の数だけ可能性があることを忘れず、愛する檜葉町のために皆さんとの出会いを大切にしながらより魅力ある檜葉町をつくっていきたいと思います。ご参加いただいた皆様、ご協力くださった各種団体の皆様、本当にありがとうございました。

意見・感想・提案

◆印象に残った人・言葉

- 「災害の上に立って生きていく」(木戸の交民家 緑川さん)
- 「コミュニティは、つくろうと思ってできるものではない。“楽しみ”によって、自然に生まれる」(語り部 高原さん)
- 「2人でもコミュニティになる」(語り部 高原さん)
- 「まちづくりは“よそ者”“若者”“バカ者”が担うとうまくいく」(ゆず研究会 松本さん)
- 「単なるボランティアではなく、名前を呼び合える関係に」(そよ風届け隊 吉村さん)

◆参加前の檜葉町のイメージ

- 荒れ果てた寂しい町/原発被災地で沈んでいるまち
- イメージが全く湧かなかった。

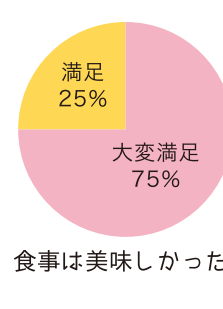
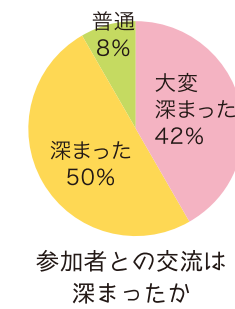
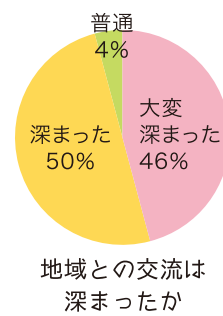
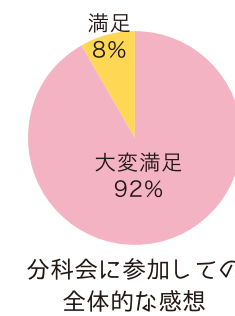
◆参加後の檜葉町のイメージ

- 明るい、たくましい!人を惹きつけるなにかを持っている。
- とても市民力・住民力のあるまち。
- 全く印象が変わった。元気な人がいて行政も民間も外の人にも色々な方が力を合わせて復興まちづくりに取り組んでいて驚いた。
- 自分が本当に「やりたいこと」を突き詰めて、それが周りに良い影響を与えているまち。

◆感想

- 町を愛し、好きになる。それが第一の条件ですね。
- 檜葉町の分科会を選んでよかったです。また訪問させていただきたいです。
- 頻繁に来ることはできなくてもきっとこれからもずっと檜葉町のことを気にして、思い続けます。
- 住民のみなさんの複雑な気持ちも知ることができとても学びが多かったです。

参加者アンケート 紹介





いわき市豊間地区「塩屋崎灯台」前にて

開催趣旨

いわき市で2013年に生まれた「未来会議」は「対話の場づくり」を最低30年続けようとする団体です。

震災・原発事故はこの地域の人々にさまざまな分断をもたらし、既存の課題も加速させました。この分断や課題を人々の「対話」で緩和する試みは、地域と人々の課題を可視化し、自ら仲間を見つけ解決に挑む人に勇気を与え、多くの活動を芽吹かせています。参加者の地域の状況や活動を持ち寄り、双葉郡・いわき市の現在の風景を通して見えてくる未来のことを、「多様性」「対等」を鍵として、それぞれの地域のいま・未来について対話し、浮かび上がるものを共有する場として開催しました



活発な意見交換がされた、夜なべ談義。



双葉郡富岡町・いわき市豊間地区で、視察研修。

プログラム

1日目【11月17日】

- 12:30 Jヴィレッジ出発
- 13:00 ふたばいんふお見学 徒歩でホテルひさごへ
- 13:30 ホテルひさご着、昼食
- 13:50 オリエンテーション・スタッフ紹介
- 14:10 参加者チェックインワークショップ 参加者自己紹介
- 14:40 富岡町内視察出発 バトカー・慰霊碑参拝、富岡駅、観陽亭跡
- 15:50 夜の森地区
- 16:10 富岡町出発(常磐道)車内で振り返りワークショップ
- 17:00 古滝屋着 チェックイン 休憩
- 18:00 分科会交流会(じゃんがら演舞)古滝屋松の間
- 20:30 夜なべ談義 古滝屋音羽屋

2日目【11月18日】

- 朝食
- 8:45 ロビー集合
- 9:00 古滝屋出発 豊間・薄磯地区視察へ
- 車内でワークショップ
- 9:40 慰霊碑参拝
- 10:00 災害公営住宅豊間団地(講話)
- 10:30 地区視察



まちづくりファシリテーター山口寛氏が対話ワークショップをガイド。

1日目【11月17日】

実施概要

向かったのは、2017年4月1日に一部帰還困難区域を除く避難指示が解除された、双葉郡富岡町。未来会議はいわき市を中心に活動してはいますが、関わっている人々は、いわき市のみならず双葉郡出身や移住者など様々。参加者の皆さんに、帰還困難区域を含む双葉郡の現状も見てもらうため、富岡町出身のスタッフ藤田大・平山勉をガイドに視察研修を行いました。最初に双葉郡8町村の情報が一目でわかる交流施設「ふたばいんふお」を自由見学しました。



避難指示区域が混在する富岡町



未来会議スタッフが個別に解説。

避難指示解除前から復旧作業にあたる作業員の宿舎として利用されているビジネスホテル「ひさご」にて、昼食と最初のワークショップ。山口寛氏をファシリテーターに、「トークフォークダンス」という手法で行いました。椅子を向かい合わせの二重の輪にし → 一対一で向き合いながら、お互いに決められた2分ほど話をし → 1人ずれてまた話します。この手法は初対面・年齢差などに関わらず対話が可能で、皆さん話し足りないくらい盛り上がりました。



昼食は、作業員の方達と同じ食事を体験。



ツアーを通して対話を行いました。

バス車窓から視察しつつ、津波からの避難誘導中被災し警官2名が殉職されたバトカーが震災遺構として展示されている公園で慰霊碑参拝。次に訪れたのは、小浜(こばま)地区にあった冠婚葬祭施設「観陽亭」跡地。断崖絶壁の標高20m以上の場所まで津波は到達しました。ここからは福島第二原発がはっきり見え、また海岸には津波で漂着したままの船も。最後に訪れたのは、桜の名所、夜ノ森(よのもり)地区へ。避難中に野生化した動物などに荒らされた家屋を目の当たりにしました。



僧侶でもあるスタッフ霜村真康による法要で、追悼の祈りを捧げました。



帰還困難区域と避難指示解除区域を分ける桜並木途中のバリケード

バス中で振り返りのワークショップを行いながら、宿舎の「いわき市湯本温泉元禄彩雅宿古滝屋」へ到着し、分科会交流会と夜なべ談義。夕食は、さんまポーポー焼き、あんこう鍋、刺身舟盛り、メヒカリ、トマト、キノコ、満州黒豚など、いわきの素材を存分に使ったメニューでおもてなし。「浜通りの地酒を楽しむ会」厳選の浜通りの地酒や、参加者の皆様からお土産に頂いた地酒が並びました。また、いわき市の伝統芸能「じゃんがら念仏踊り」も披露されました。



全国の参加者の皆さんと地元の人々が混ざり合い、談義と温泉を楽しんだ一夜でした。

2日目【11月18日】

実施概要

2日目のガイドは、古滝屋の旦那であり、被災地スタディーツアー（Fスタディーツアー）も運営する里見喜生さん。訪問先はいわき市の沿岸部、津波で大きな被害を受けた薄磯（うすいそ）・豊間（とよま）地区です。まず慰霊碑参拝。この薄磯地区だけで122人の方が亡くなりました。碑が建立されている場所から、いまは海が見られなくなっています。



塩屋埼灯台から望む、震災後一変した薄磯海岸。



慰霊碑を参拝し、被災当時に思いを巡らせます。

続いて豊間地区にある災害公営住宅を訪れ、まず集会所に入り、自治会長を務める遠藤さんからの話を伺いました。大津波の襲来、避難、地区の再建、住宅内のコミュニティ活動まで、最前線で尽力されるからこそその内容に、じっと耳を傾けました。その後グループに分かれ公営住宅敷地内の見学。遠藤さんは次に訪れる塩屋埼灯台まで同行し、お話しいただきました。



災害公営住宅で発生する課題についてもお話しくださいました。



皆さま真剣に耳を傾けました。

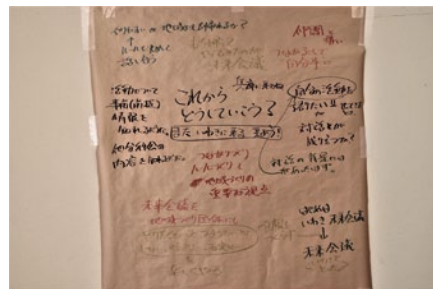
この地区最後の訪問地は、全国的にも知られた観光地塩屋埼灯台。全国で16か所しかない頂上までのぼることが出来る灯台です。震災での消灯を乗り越えて太平洋を照らす灯火の脇まで参加者全員が登りました。眼下には、この日訪れた薄磯・豊間地区を一望したみなさんには、どんな思いが生まれたのでしょうか。麓のお土産屋さんで買い物も楽しみ、豊間地区を後にしました。



灯台頂上で、眼下の防潮堤から第二原発まで一望し、思いを巡らせます。



いわき駅にほど近い平地区の施設に移動し、昼食の海鮮丼を味わって、最後の対話ワークショップに臨みました。まず全員で丸く輪になりルール説明ののち、4-5人で3日間の感想やその体験をどう生かすか話し合い、再度大きな輪になって発表し合いました。未来会議のルールを決めた対話のやり方を地元を持ち帰りたい、見て感じることで、福島のことを他人ごとから自分ごとになった、などの言葉が交換されました。



最後のワークショップで話された、参加者の皆さんの言葉たち。

分科会全体をととして

分科会を振り返って

「地域づくり団体」の自覚もない任意団体「未来会議」に、分科会を任せ、活動を知っていただく機会を下さったことを深く感謝します。いわき市とその周辺の地域の人々が現在経験しつつある課題に「対話」の力で向き合う取り組みを体験いただく今回のツアーは、運営する我々にとっても、全国で地域づくりに活躍される参加者のみなさんの意見をうかがう貴重な機会となりました。一方で、交流会で皆さまをお待たせしてしまうなど、拙い点があったことをお詫びいたします。

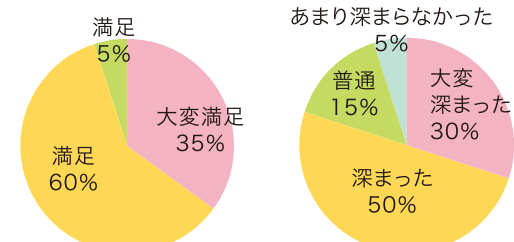
最低30年続ける対話が地域のどんな未来をもたらすのか、答えは計り知れませんが、参加者の方々より「福島のことを自分ごとになった」「なぜ地域づくりの活動をするのかを問い直す機会となった」「未来会議のやり方を持ち帰りたい」などの言葉を頂き、私たちも非常に心強く、それぞれ活動への力を受け取れたと思います。

この分科会での経験をきっかけに、参加者・スタッフの間の交流が継続し、学びと活動がより深まり、幸せに暮らせる地域が実現することを願います。またいつでもお立ちよりください！未来会議の仲間たちがたっぴりおもてなしいたします！

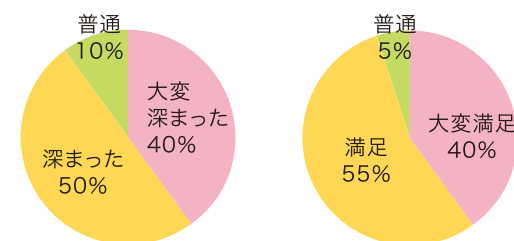


お別れ前に集合写真。またお目にかかりましょう！

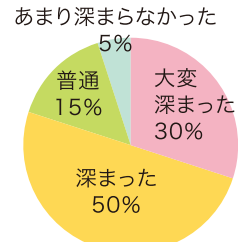
参加者アンケート紹介



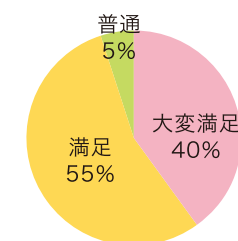
分科会に参加しての
全体的な感想



参加者との交流は
深まったか



地域との交流は
深まったか



食事は美味しかったか

意見・感想・提案

- 参加者が対話するプログラムは斬新で面白かったです。一方で未来会議さんの活動や設立経緯などをお聞きする機会が少なく、もう少し伺いたかったという思いです。
- いわき分科会は未来会議が主導し、行政主導を一切感じませんでした。素晴らしい。
- 未来会議が被災地の課題解決の方法として対話を選んだ理由を、実践の場で知ることができ、大変勇気づけられました。
- 未来会議のビジョン、活動内容、チームワークの良さ、おもてなしの心等々本当に満足度の高い分科会でした。
- 帰還困難区域などの実情を見る事ができ、震災の傷跡の生々しさを実感できた。
- 地元の伝統的な料理や新鮮な魚介類を味わえてとても良かった。じゃんがら念仏踊りもとても印象だった。
- 災害公営住宅やそこで生活している方々のお話を伺えたのは、とても参考になった。
- もう少し時間があっても良かったと感じました。

参加者一覧

都道府県名	氏名	所属団体
-------	----	------

▶第1分科会 福島市

鳥 取 県	高 須 広 海	稲葉山地区公民館
福 岡 県	橘 味 加	福岡県庁企画・地域振興部広域地域振興課
香 川 県	吉 田 恵	香川県政策部地域活力推進課
香 川 県	藤 岡 修	五郷里づくりの会
香 川 県	岡 野 恭 子	高松市コミュニティ推進課
兵 庫 県	宇 高 昌 利	織錦在郷倶楽部
兵 庫 県	三 木 武 行	特定非営利活動法人玄武洞ガイドクラブ
埼 玉 県	茂 木 八 千 代	文科創生研究所
広 島 県	菅 原 繁 隆	呉市まちづくりサポーター
東 京 都	片 桐 研 二	地域づくり団体全国協議会
石 川 県	鍛 冶 武 司	NPO法人のとキリシマツツジの郷
兵 庫 県	岩 本 有 樹	山陰海岸ジオパーク推進協議会事務局
福 島 県	山 田 吏 依 子	一般社団法人ふくしま連携復興センター
福 島 県	大 野 光	一般社団法人ふくしま連携復興センター
福 島 県	佐 藤 美 樹	一般社団法人ふくしま連携復興センター
福 島 県	国 分 英 男	福島市役所市民協働課
鳥 取 県	荒 金 敏 文	阿毘緑むらづくり協議会

▶第2分科会 二本松市

大 阪 府	阪 野 修	個人
福 岡 県	尾 知 沙也香	福岡県庁企画・地域振興部広域地域振興課
香 川 県	藤 岡 紘	五郷里づくりの会
兵 庫 県	田 野 公 大	但馬小代塾
兵 庫 県	三 浦 将 太	第37回地域づくり団体全国研修会兵庫大会実行委員会
沖 縄 県	伊 波 晋	沖縄県地域振興協会
兵 庫 県	桑 原 弘 信	淡路ふるさと塾
石 川 県	三 津 井 司	石川地域づくり協会(NPOいわ介護ボランティアセンター)
島 根 県	佐 藤 結 子	島根県地域振興部しまね暮らし推進課
熊 本 県	古 家 公 晴	きくか夢工房
東 京 都	中 川 晃 介	地域づくり団体全国協議会
香 川 県	石 井 優 香	三豊市政策部田園都市推進課地域おこし協力隊
香 川 県	合 田 和 稔	特定非営利活動法人まちづくり推進隊山本
沖 縄 県	石 原 真 裕	沖縄県企画部地域・離島課
福 島 県	大 栗 行 貴	国見町
岡 山 県	江 田 香 代	岡山市地域おこし協力隊
東 京 都	高 橋 径 子	一般社団法人RCF



都道府県名	氏名	所属団体
-------	----	------

▶第3分科会 郡山市

群 馬 県	山 崎 紫 生	文科創生研究所
香 川 県	工 藤 功 雄	東香川市役所地域創生課
香 川 県	竹 田 誠 一	東香川市役所地域創生課
栃 木 県	益 子 昂 大	栃木県総合政策部地域振興課
宮 崎 県	長 倉 有 輝	宮崎県総合政策部中山間・地域政策課
香 川 県	岡 陽 子	高松市コミュニティ協議会連合会
兵 庫 県	木 下 道 則	特定非営利活動法人 玄武洞ガイドクラブ
兵 庫 県	岡 田 真 裕 美	第37回地域づくり団体全国研修会兵庫大会実行委員会
埼 玉 県	杉 沢 正 子	まちづくりネットワークかぞ
埼 玉 県	齋 藤 安 津 美	NPO法人かぞ市民ネット
埼 玉 県	森 恵 美 子	NPO法人かぞ市民ネット
沖 縄 県	上 原 嘉 彦	沖縄県地域振興協会
福 井 県	多 田 憲 一	NPO法人農と地域のふれあいネットワーク
福 井 県	山 村 信 二	福井県総務部市町振興課
東 京 都	岩 崎 正 敏	一般財団法人地域活性化センター
東 京 都	宮 本 明 人	地域づくり団体全国協議会
長 崎 県	福 喜 哲 史	面白ちんぐ倶楽部
長 崎 県	村 山 拓 男	長崎県企画振興部地域づくり推進課
香 川 県	芳 重 博 文	特定非営利活動法人まちづくり推進隊高瀬
熊 本 県	簗 毛 恵 理	熊本県人吉市役所総務部自治振興課
熊 本 県	濱 田 孝 正	美里フットパス協会
兵 庫 県	藤 本 高 英	NPO法人サインポスト
沖 縄 県	宮 里 薫	沖縄県企画部地域・離島課
鳥 取 県	大 西 大 輝	鳥取県参画協働課
鳥 取 県	四 門 隆	琴浦まちづくりネットワーク
鳥 取 県	村 上 敦 史	鳥取県参画協働課

▶第4分科会 三春町

群 馬 県	星 野 千 春	群馬県企画部地域政策課 地域づくり支援係
宮 崎 県	島 中 星 輝	株式会社ブリング
兵 庫 県	島 崎 淳 二	藁の家をつくる会
兵 庫 県	北 村 久 美 子	NPO法人たんばコミュニティネットワーク
東 京 都	平 田 茂 雄	地域づくり団体全国協議会
熊 本 県	吉 村 明 子	すみっこの台所
熊 本 県	江 崎 孝 俊	すずかけ台愛友会
熊 本 県	内 山 葵	熊本県企画振興部地域・文化振興局地域振興課
福 島 県	天 野 淳	福島県企画調整部地域振興課
福 島 県	栗 林 政 和	福島県企画調整部地域振興課
福 島 県	吉 田 大 智	福島県企画調整部地域振興課

都道府県名	氏名	所属団体
-------	----	------

▶第5分科会 鮫川村

兵 庫 県	浅 見 雅 之	特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所
兵 庫 県	木 村 幸 一	淡路ふるさと塾
沖 縄 県	高 平 兼 司	沖縄県地域づくりネットワーク事務局
沖 縄 県	当 山 昌 治	名護市青少年育成協議会羽地支部
東 京 都	本 田 節	地域づくり団体全国協議会
東 京 都	鈴 木 悠 介	地域づくり団体全国協議会
香 川 県	松 村 慶 吾	特定非営利活動法人まちづくり推進隊詫間
石 川 県	本 谷 智 子	中島地域づくり協議会七尾市地域おこし協力隊
熊 本 県	宮 本 雅 伸	多良木町グリーンソーリズム研究会
鳥 取 県	池 田 幸 恵	やらいや逢坂
福 島 県	木 戸 善 幸	福島県県南地方振興局

▶第6分科会 三島町

沖 縄 県	山 崎 柊 平	沖縄県庁 地域・離島課
長 崎 県	久 保 雄 策	長崎県地域づくりネットワーク協議会
石 川 県	濱 博 一	(株)アスリック
香 川 県	神 高 伸 江	香川県政策部地域活力推進課
香 川 県	小 野 裕 美 子	香川県政策部地域活力推進課
兵 庫 県	崎 谷 久 義	ふるさととの原風景再生プロジェクト「太市の郷」
兵 庫 県	宮 脇 壽 一	但馬小代塾
沖 縄 県	赤 嶺 龍 風	沖縄ハンズオンNPO
青 森 県	森 田 泰 男	未来創造ひらない塾
沖 縄 県	金 城 町 子	恩納村エコソーリズム研究会
沖 縄 県	島 袋 次 郎	伊計島11班
東 京 都	佐 藤 啓 太 郎	地域づくり団体全国協議会
東 京 都	宮 下 夢 美	地域づくり団体全国協議会
長 崎 県	吉 田 寛 司	アフロス五島
鳥 取 県	寺 坂 純 子	公益財団法人とっとり県民活動活性化センター
佐 賀 県	川 副 知 子	特定非営利活動法人佐賀県CSO推進機構
熊 本 県	福 山 博 章	熊本県建築士会山鹿支部まちづくり景観研究部会



都道府県名	氏名	所属団体
-------	----	------

▶第7分科会 昭和村

宮 城 県	草 野 祐 子	みやぎジョネット
和歌山県	梅 原 慎 治	和歌山県紀北県税事務所課税課
長 崎 県	尾 崎 奈 々	島原木綿織保存会
長 崎 県	菊 池 法 子	島原木綿織保存会
長 崎 県	入 江 倪 子	島原木綿織保存会
兵 庫 県	井 藤 久 士	ふるさととの原風景再生プロジェクト「太市の郷」
兵 庫 県	高 林 主 佳	第37回地域づくり団体全国研修会兵庫大会実行委員会
青 森 県	中 島 千 恵 美	青森県地域づくり団体ネットワーク推進協議会
宮 城 県	赤 坂 隆 一	みやぎ地域づくり団体協議会
東 京 都	菊 池 晃 利	総務省地域力創造グループ地域自立応援課
熊 本 県	藤 本 千 代 美	やまとのやまんまの会
沖 縄 県	松 本 直 人	沖縄県企画部地域・離島課
埼 玉 県	伊 藤 源 二	埼玉県地域政策課
東 京 都	薄 良 美	デザインシエフ株式会社

▶第8分科会 南会津町

兵 庫 県	加 藤 智 子	公益財団法人しろう森林王国観光協会
兵 庫 県	平 福 祐 介	元町マルシェ
沖 縄 県	山 城 定 雄	沖縄県地域づくりネットワーク事務局
東 京 都	道 添 瞳	地域づくり団体全国協議会
東 京 都	佐 々 木 浩	総務省
香 川 県	関 智 昭	特定非営利活動法人まちづくり推進隊高瀬
香 川 県	北 山 定 男	王越町共に生きるまちづくり推進協議会
熊 本 県	竹 下 美 敬	熊本県火の国未来づくりネットワーク上益城ブロック
福 島 県	半 澤 浩 司	福島県企画調整部復興・総合計画課
鳥 取 県	小 林 直 哉	築き会
鳥 取 県	伊 井 野 美 雪	鳥取県参画協働課
福 島 県	吉 田 靖 章	小野町役場企画政策課
東 京 都	西 賀 錬	東洋大学
東 京 都	小 林 咲 良	東洋大学
東 京 都	櫻 井 友 恵	東洋大学
東 京 都	千 葉 龍 也	東洋大学
東 京 都	中 谷 明 彦	東洋大学
東 京 都	中 村 友 唯	東洋大学
東 京 都	宮 島 大 照	東洋大学

都道府県名	氏名	所属団体
-------	----	------

▶第9分科会 南相馬市

宮 崎 県	中 村	光 彦	みやこんじょ力俣組合
宮 崎 県	石 田	達 也	特定非営利活動法人宮崎文化本舗
宮 崎 県	猿 渡	慧	宮崎県総合政策部中山間・地域政策課
兵 庫 県	水 埜	浩	兵庫県庁
兵 庫 県	城 下	隆 弘	第37回地域づくり団体全国研修会兵庫大会実行委員会
宮 崎 県	寺 田	早 江	みやこんじょ力俣組合
兵 庫 県	足 立	宣 孝	FM805たんば
香 川 県	三 宅	俊 喜	特定非営利活動法人まちづくり推進隊詫間
鳥 取 県	毛 利	葉	公益財団法人とっとり県民活動活性化センター
埼 玉 県	持 田	雅 仁	埼玉県地域政策課
福 島 県	三 瓶	大 樹	福島県企画調整部地域振興課
福 島 県	大 橋	和 之	福島県企画調整部地域振興課
福 島 県	渡 邊	恭 浩	福島県企画調整部地域振興課
福 島 県	日 景	智 也	福島県企画調整部地域振興課

▶第10分科会 檜葉町

佐 賀 県	金ヶ江	佑 介	佐賀市協働推進課
群 馬 県	遠 藤	匡	群馬県企画部地域政策課地域づくり支援係
石 川 県	川 北	重 信	虹のかけはし
香 川 県	藤 田	一	五郷里づくりの会
香 川 県	藤 本	達 也	仏生山まちプランニングルーム
香 川 県	松岡	由美子	三木町田中出張所
香 川 県	溝 渕	裕 子	田中地区まちづくり協議会
香 川 県	多 田	等	田中地区まちづくり協議会
香 川 県	中 川	和 樹	三木おやじおふくろの会
香 川 県	川 波	礼 子	三木おやじおふくろの会
香 川 県	白 井	敏 雄	三木おやじおふくろの会
香 川 県	富 田	浩 之	三木町政策課
兵 庫 県	柏 木	登 起	一般財団法人明石コミュニティ創造協会
兵 庫 県	千 種	和 英	元町マルシェ
兵 庫 県	荻野	美恵子	NPO法人たんばコミュニティネットワーク
長 崎 県	山 崎	智 宏	長崎市中央総合事務所総務課
東 京 都	沖 山	尚 美	一般財団法人電源地域振興センター
香 川 県	白 川	靖 彦	観音寺役所
和歌山県	松 浦	梨 恵	和歌山県庁地域政策課
東 京 都	柳 井	雅 也	地域づくり団体全国協議会
東 京 都	山 根	絵 美	地域づくり団体全国協議会
長 崎 県	中 山	忠 治	杵岐・島おこし応援隊「チーム防人」
長 崎 県	長 嶋	保 代	杵岐・島おこし応援隊「チーム防人」
香 川 県	曾 根	俊 幸	特定非営利活動法人まちづくり推進隊詫間
石 川 県	谷 口	健 一	石川地域づくり協会
東 京 都	篠 田	千 冬	復興庁
熊 本 県	高 山	登	立神峽里地公園管理組合協議会

都道府県名	氏名	所属団体
-------	----	------

▶第11分科会 いわき市

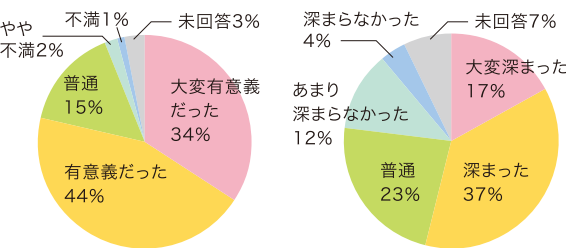
群 馬 県	宮 内	毅	前橋市役所生活課
群 馬 県	深 谷	茂	前橋永明地区地域づくり会議会
宮 崎 県	壹 岐	公 晴	特定非営利活動法人宮崎文化本舗
石 川 県	赤 須	治 郎	石川地域づくり協会
香 川 県	後 藤	努	香川県
香 川 県	田尾	亜希子	特定非営利活動法人まちづくり推進隊詫間
香 川 県	豊島	夕起子	特定非営利活動法人まちづくり推進隊高瀬
滋 賀 県	山 本	実 央	滋賀県総務部市町振興課
兵 庫 県	木 上	裕 貴	一般財団法人明石コミュニティ創造協会
兵 庫 県	大 宮	慶 子	ハートランドぐり石ネット
沖 縄 県	前 泊	博 美	いけま福祉支援センター
広 島 県	浦 野	朋 子	呉市地域協働課
東 京 都	岡 崎	昌 之	地域づくり団体全国協議会
東 京 都	関 口	英 樹	地域づくり団体全国協議会
長 崎 県	岡 本	勇 一	野母崎で音楽を聴く会
香 川 県	神 原	達	三豊市政策部田園都市推進課
香 川 県	澤 井	元 気	三豊市政策部田園都市推進課地域おこし協力隊
長 野 県	酒 井	哲 夫	ながの未来塾
長 野 県	伊 藤	雅 啓	長野県庁
石 川 県	政 田	成 利	NPO法人のとクリシマツツジの郷
石 川 県	渡 辺	直 英	石川県小松県税事務所
岡 山 県	河 田	雅 史	総社仕掛人の会
熊 本 県	沢 畑	亨	水俣市久野木ふるさとセンター・愛林館
熊 本 県	林	和 廣	玉東町ふるさと勉強会

▶全体会・全体交流会

宮 城 県	兼 子	佳 恵	特定非営利活動法人石巻復興支援ネットワーク
長 野 県	有 賀	茂 人	さわそこ里山資源を活用する会
福 島 県	小 沼	郁 互	いわき経済同友会



全体交流会



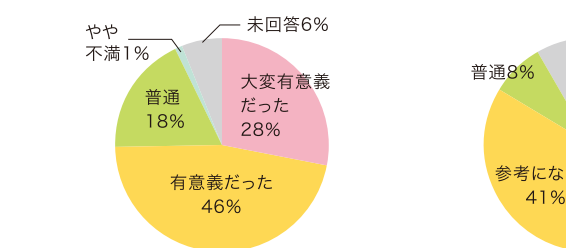
全体交流会に参加しての全体的な感想

- 参加人数に対し、会場が狭かったように思います。テーブルを分科会ごと、あるいは参加地域ごとなど多少関連のある人を集めて頂くと交流しやすかったかと思います。歓迎レセプションのスパリゾートハワイアンズのフラは素晴らしかったです。ありがとうございました。

- フラダンスが良かった。おもてなしの芸事は不要。地域づくりの文化活動で見飽きた。このような歌舞踊曲は歓迎

- 初めての参加で右も左もわからなかったが、普段お会いできないような方々とコミュニケーションがとれて地域のこと、事業や取り組みについてなどお話出来てとても充実した時間になりました。こういった機会があるから発展に繋がるのだなと思ったので、今後もずっと続いてほしいと思いました。

全体会



全体会に参加した全体的な感想

その他自由意見

- 各団体の活動紹介が事前にあり、予備知識として分科会に参加できることはとても良い！

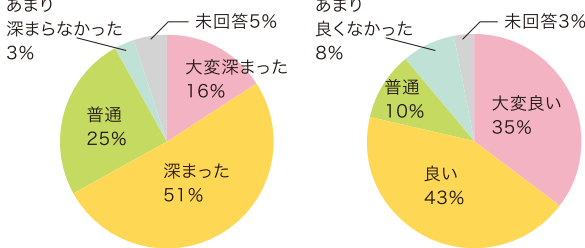
- 発表資料のコピーがあればありがたい。

- 参加しない分科会のことも、短くわかりやすくまとめられた発表で、よくわかりました。申込のときに見れていたら、参考になったなーとおもいました。

- 参加しない分科会の話が聞けてよかったです。

- 到着時の案内(駅)が十分でなく困った。宿泊は良かった。

- あいさつが長い。分科会紹介をもっと長く。



参加者との交流は深まったか

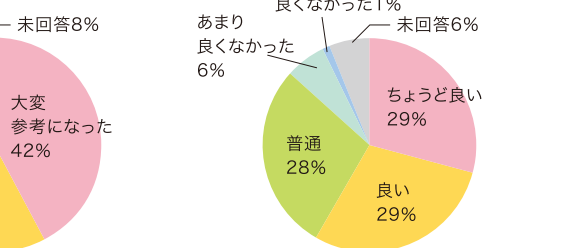
- 「はじまり」というキーワードからJヴィレッジの会場はとても意義深いと感じました。

- 一人で参加しましたが、他の方は知り合いが多いようでなかなか入れませんでした。一人参加者への配慮があると良かったです。

- ビュッフェ形式いいのですが、あらかじめいくらかテーブルに食事が用意されていると良かったです。人をかき分けて料理をとりに行くのが苦手で、あまり食べられなかったです。福島日本酒試飲コーナーはとても嬉しかったです。

- 分科会が同じ方とはあまり交流ができなかったのですが(名札をみて探すしか方法がなかったので)、様々な方と名刺交換、情報交換できました。

- 分科会後の方が交流しやすいと感じました。



プログラムの時間配分

- 短い時間で県内のとりくみをコンパクトに聞くことができて良かったと思う。全国的な状況について説明までは求めていないが資料等があるとよいのではないか。

- 県内の取組を知る良いきっかけとなりました。時間内の発表ではなかなか取組の全体をつかめなかったので、機会を見つけて参加したい。

- 各分科会の紹介をもう少し長い時間、聞けばよかった。発表をきき、あそこにも行きたい!との思いがしました。皆さんの具体的な取組はとても魅力的。今回行けないところにもたずねて行きたいと思いました。その際は宜しくお願いします。

第36回地域づくり団体全国研修交流会 福島大会報告書

第36回地域づくり団体全国研修交流会福島大会実行委員会
平成31年1月発行

編集・発行 第36回地域づくり団体全国研修交流会
福島大会実行委員会事務局

参加申込受付業務等受託者 株式会社郡中トラベル